

豊後大野市内遺跡 発掘調査概要報告書 8

— 平成28年度調査 —

2018

豊後大野市教育委員会

豊後大野市内遺跡 発掘調査概要報告書 8

— 平成28年度調査 —

2018

豊後大野市教育委員会

例 言

- 1、本書は平成28年度に豊後大野市教育委員会が国庫及び県費の補助を受けて実施した市内遺跡事業の確認調査概要報告書である。
- 2、調査の体制は以下のとおりである。

調査指導 田中裕介(別府大学教授)
越智淳平(大分県教育庁文化課)

調査主体 久保田正治(豊後大野市教育委員会教育長)

調査担当 川野文敏(社会教育課長 平成28年4月～12月)
真部直廣(社会教育課長 平成29年1月～3月)
高野弘之(社会教育課文化財係長) 諸岡郁 豊田徹士 大野幸則(同文化財係)

このほか、杉井健氏(熊本大学准教授)、吉田和彦氏(杵築市教育委員会)、井大樹氏(大分県立埋蔵文化財センター)のご視察・ご助言をいただいた。
- 3、漆生古墳群の調査における遺構実測およびトレース、坊ノ原古墳の墳丘測量図作成については玉川剛司氏と別府大学考古学研究室生の協力をいただいた。また、発掘調査は別府大学の「埋蔵文化財実習Ⅱ(遺跡発掘)」の授業として行った。写真撮影は調査員で行った。
- 4、坊ノ原古墳の遺物実測およびトレースは雅企画有限会社に委託した。
- 5、丸山古墳の墳丘測量図作成については(株)システムサポートに委託した。
- 6、本書の執筆は漆生古墳群第6次調査について田中裕介氏、玉川剛司氏、塩見恭平氏、高木慎太郎氏、竹永昂平氏(別府大学考古学研究室)、丸山古墳石棺については井大樹氏より玉稿をいただいた。その他の執筆は調査担当が行い、編集は諸岡が行った。

目 次

I はじめに	1	3 まとめ	19
II 漆生古墳群	3	IV 丸山古墳	22
1 調査の経過	3	1 墳丘測量調査について	22
2 漆生古墳群第6次調査	5	2 丸山古墳石棺蓋	24
III 坊ノ原古墳	14	V 旧大野高校遺跡	27
1 調査の経過	14	VI 城ヶ平遺跡	28
2 確認調査の概要	15		

I はじめに

1 調査に至る経過

大分県豊後大野市は、平成17年3月に大野郡7町村が合併して成立した。その市域は広大で、大分県南部の大野川中流域のほぼ大部分に相当する。結果、豊後大野市内には先史から近代に至る様々な歴史・文化遺産を有することとなり、それは約500件の指定文化財や約700箇所の周知遺跡数に表わされている。これらの保護について合併前の各町村時代から引継いで取り組まれているが、特に市域の広域化と同時に各種開発工事も増加し、比例して埋蔵文化財調査の対応件数も増加傾向にある。

豊後大野市教育委員会は国庫・県費の補助を得て、各種開発工事に対する遺跡の保存に向けた協議資料作成の調査と並行して、主要古墳などの範囲確認のための発掘調査を実施している。平成28年度は遺跡範囲確認として漆生古墳群と坊ノ原古墳の2箇所で発掘調査、丸山古墳で墳丘測量調査を実施し、緊急開発工事に伴う調査は旧大野高校遺跡、城ヶ平遺跡の2箇所で実施した。

漆生古墳群は、平成23年度より別府大学の協力を得て、古墳群4基の墳丘測量図の作成、及び確認調査を行ってきたが、平成28年度も継続して第6次調査として1号墳後円部と3号墳の墳頂部など未確認箇所の調査を実施した。

坊ノ原古墳は平成27年度に続いて確認調査を行い、周溝などの遺構や遺物を確認することができた。丸山古墳では墳丘測量並びに石棺実測を行った。

開発工事に伴って調査した旧大野高校遺跡と城ヶ平遺跡では、特に遺構・遺物は出土せず工事実施となった。

これらの発掘調査の他、主体部遺構の残存状況確認のため、地中レーダー探査業務を委託して行っているが、詳細は後の報告に期したい。

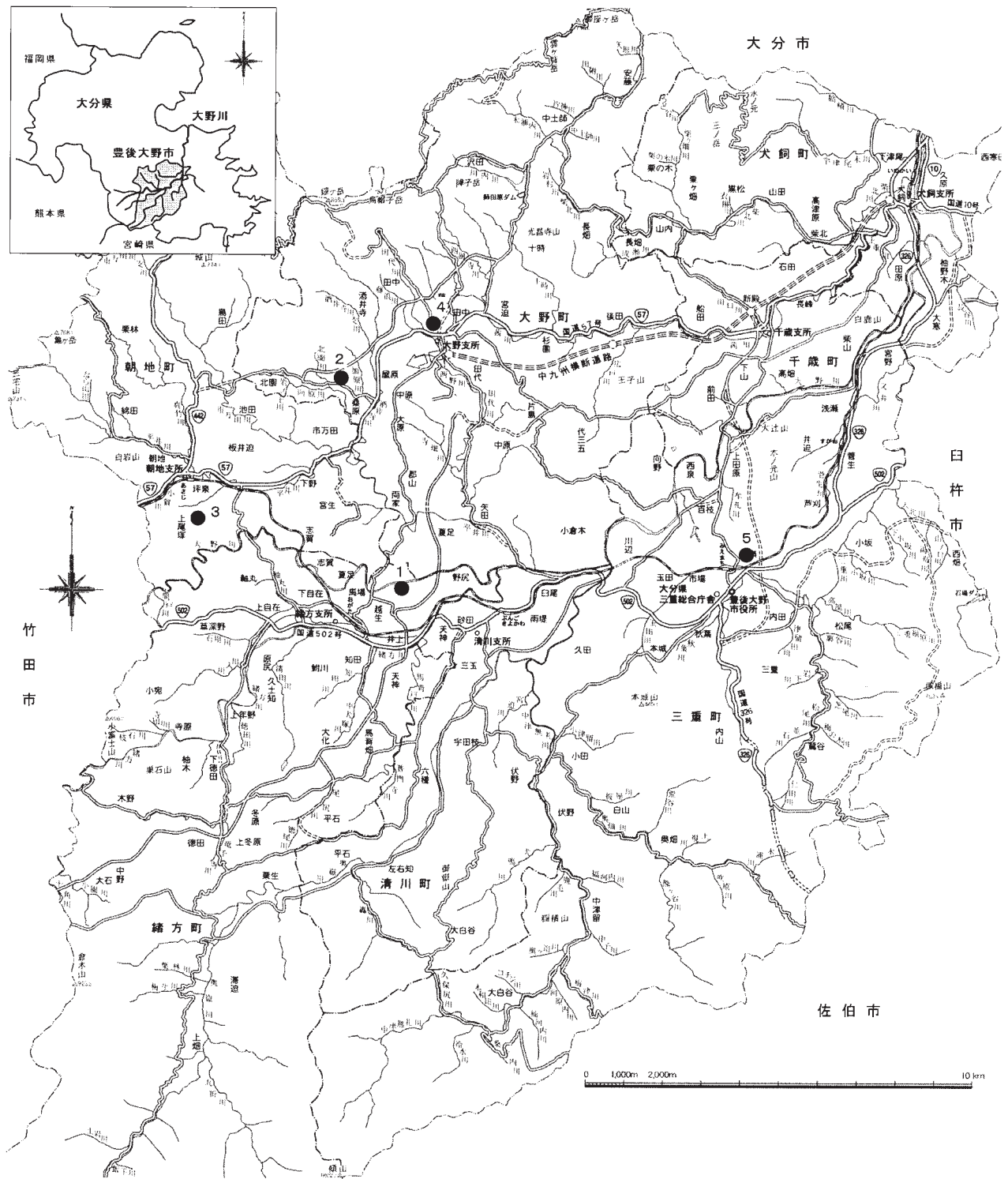
2 歴史的環境

大野川中流域には阿蘇溶結凝灰岩による台地や、大野川本流及び支流による沖積平野などの地形が随所に見られ、これらの地形上に数多くの遺跡が所在している。

旧石器時代の遺跡は国指定史跡の岩戸遺跡をはじめ、市ノ久保遺跡・津留遺跡・百枝遺跡・駒方遺跡群など著名な遺跡が多く知られている。縄文時代も同様で、早期の田村遺跡・鳥穴遺跡、前期の千人塚遺跡、後期の夏足原遺跡・惣田遺跡、晩期の大石遺跡・宮地前遺跡などで良好な遺構や遺物などが確認されている。

弥生時代では特に後期に大規模集落として多くの遺跡が各台地上でみられる。200基を超える竪穴住居跡や掘立柱建物群が検出された鹿道原遺跡をはじめ、高松遺跡・高添遺跡・二本木遺跡・陣箱遺跡など多数知られている。県下でも代表的な遺跡集中地域であるが、古墳時代以後になると集落遺跡は減少し、生活の痕跡は台地上から谷底平野への変化がみられる。しかし墳墓の遺跡は多く、市内には8基の前方後円墳をはじめ、各河川流域の単位で古墳群が築造されている。特に前方後円墳6基が集中する三重川流域周辺を中心に、平井川流域周辺に円墳群、緒方川流域等に横穴墓群など数多くの古墳・横穴墓の分布が知られている。

歴史時代以後について、市域は豊後国大野郡の大部分に含まれる。条里跡と推定される地割が緒方平野で確認され、磨崖仏や石塔類などの石造物が多く所在する。遺跡調査例としては古代の遺跡は古市遺跡等で行われているのみであったが、近年加原遺跡で古代の建物群跡などが確認され、郡衙関連の施設跡と推定される。中世になると建物遺構が惣田遺跡や高添遺跡で、墳墓群が千人塚遺跡で検出されている。また、松尾城や高尾城など山城をはじめ、上門出遺跡や一万田氏館跡など多くの中世城館跡が確認されている。近世は臼杵藩と岡藩の領域に属し、両藩の様々な関連施設や、街道や河川港などの交通の遺跡等が所在し、一部は現在でも人々の生活や社会と結びついている。



第1図 平成28年度 市内遺跡調査位置図

No.	遺跡名	調査地	調査期間	調査内容
1	漆生古墳群	緒方町越生字大久保	2016.12.22～2017. 1. 7	範囲確認調査
2	坊ノ原古墳	大野町桑原字羽部	2016.10.19～2016.12.20	範囲確認調査
3	丸山古墳	朝地町上尾塚字丸山	2017.3.6～2017.3.15	墳丘測量調査
4	旧大野高校遺跡	大野町田中字竜王・辰頭	2016.11.3～2016.11.5	宅地造成・道路建設
5	城ヶ平遺跡	三重町赤嶺字城ヶ平	2017.2.27～2017.3. 1	宅地造成

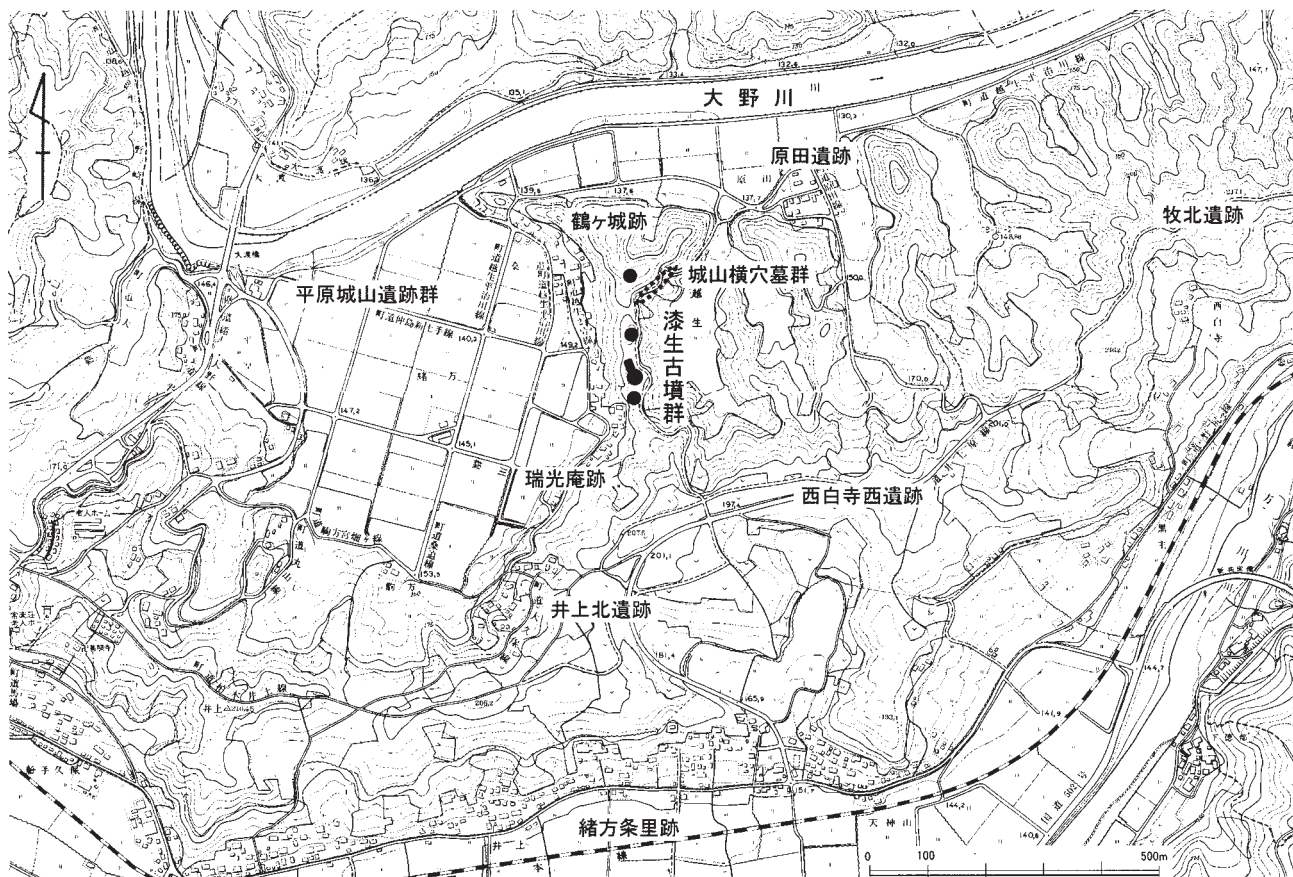
II 漆生古墳群

1 調査の経過

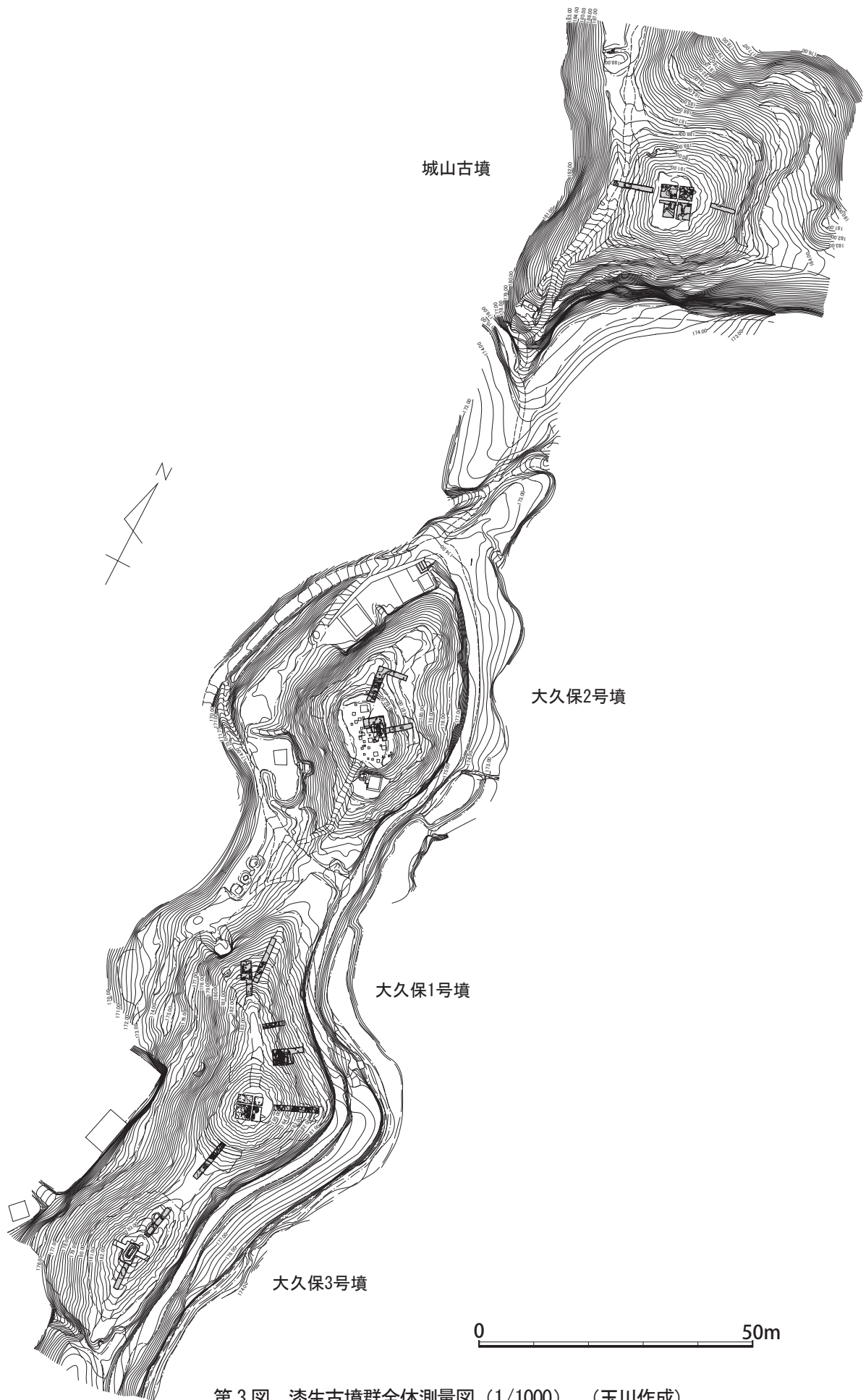
緒方町越生区の大野川沿岸を見下ろす丘陵上に所在し、前方後円墳1基を含む4基の古墳群が尾根地形上に並ぶように分布している。石棺が露出する一部の古墳は古くから存在は知られていたが(1)、平成4年に前方後円墳の発見により現地踏査が行われ、古墳群として確認された。名称としては、字大久保に3基所在することから、新発見の前方後円墳を大久保1号墳、石棺が露出している旧「大久保古墳」を大久保2号墳、1号墳の南に円墳と推定される地形上の高まりを大久保3号墳とし、字城山の城山古墳を含めて漆生古墳群と呼称されている。大久保1号墳の墳丘測量や大久保2号墳の石棺実測が行われたものの、築造時期の推定できる出土遺物等は全く知られてなく、大久保2号墳及び城山古墳は石棺の観察から中期古墳、大久保1号墳は墳形による推定で前期古墳とみられていた(2)。

遺跡範囲の確認調査として平成23年度より測量調査を開始し、平成24年度より27年度までに5次に渡って各古墳の墳端等にトレンチによる試掘調査を実施している(3)(4)(5)(6)。大久保1号墳からは葺石や段築面などを検出し、大久保2号墳や城山古墳からは主体部の墓坑の痕跡を確認するなどの成果があったが、出土遺物が少なく築造時期の手掛かりに乏しい状態のままである。平成28年度に第6次調査として、大久保1号墳の後円部墳頂の遺物の確認、3号墳墳頂部の主体部の確認調査を行った。

- 註 (1) 日名子太郎「大野郡古墳横穴調査書」『大分県史蹟名勝天然記念物調査報告第7輯』昭和4年
(2) 田中裕介ほか「緒方町越生にある漆生古墳群の観察」『おおいの考古 第6集』大分県考古学会 1993年
(3) 『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書4』豊後大野市教育委員会 2014年
(4) 『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書5』豊後大野市教育委員会 2015年
(5) 『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書6』豊後大野市教育委員会 2016年
(6) 『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書7』豊後大野市教育委員会 2017年



第2図 漆生古墳群周辺地形図



第3図 漆生古墳群全体測量図 (1/1000) (玉川作成)

2 漆生古墳群第6次調査

塩見恭平・高木慎太郎・竹永昂平・玉川剛司・田中裕介

はじめに

既往の調査から 漆生古墳群の発掘調査は、2012年度と2013年度の冬に続いて、2014年度には夏と冬に、さらに2015年度冬の5回にわたって、豊後大野市教育委員会と別府大学考古学研究室の合同調査団によって行われた。その結果大久保1号墳は前方後円墳であることが実証された。後円部には尾根線を断ち切る溝と葺石さらに1段目の平坦面も確認された。前方部前端の位置から墳長は36mとほぼ確定した。大久保2号墳は葺石や周溝などは確認できなかったため、前方後円墳ではなく別の墳形である可能性が指摘された。主体部は岩盤に直接墓坑を掘り込み、その上に舟形石棺の蓋をかぶせることが判明した。いっぽう大久保3号墳では蓋石が発見され、周囲にはベンガラ塗布が行われていた。再度蓋石をあけた痕跡の土層も見つかり、墳端の削平面をみとめて径10mほどの円墳であることが推定された。また測量調査によって方墳である可能性が指摘された城山古墳は、中世末の山城による改変の可能性が高まり、大久保3号墳と同じく小円墳の可能性が高くなった。中心主体部は箱式石棺であることが判明した。

以上のように漆生古墳群は4基からなり、葺石のある古墳、ない古墳の違いがあることもわかってきた。しかしトレンチからは出土遺物がほとんどなく、土師器の破片がわずかに出土しているのみである。したがって各古墳の築造順序や時期など依然として明確ではない。そこで今回の2016年度の調査では、これらの点を踏まえ、1号墳では後円部頂の土器の有無を昨年度に続いて精査し、3号墳では主体部を調査した(図3)。

第6次発掘調査 現地調査は諸岡、田中を主担当者に、上野、玉川が副担当であったり、2016(平成28)、12月22日(木)～24日(土)、26日(月)～28日(水)には別府大学の遺跡調査実習(集中講義)として行い、考古学研究室の学生も参加した。参加者は以下の通り。

学生 大矢健太郎、中原彰久、村田仁志(以上大学院1年)、安藤加奈子、塩見恭平、高木慎太郎(以上学部4年)、池田亘、井手基子、後藤愛美、時枝杏名、野田千輝、福島力也、古田矩美子、横井直光、吉岡拓哉、(以上学部3年)、岡元蓮、川村有紀、佐伯孝央、清水航平、末光博史、田口裕介、前田純子(以上学部2年)、伊藤龍之介、久保園梨左、菅野真由、田川麻衣(以上学部1年)

3号墳の石蓋開棺時には、志賀智史(九州国立博物館)氏に赤色顔料の採取をお願いした。また杉井健(熊本大学)吉田和彦(杵築市教委)、井大樹(大分県立埋蔵文化財センター)には、現地で助言をいただいた。

また図面整理とデジタルトレースには塩見・高木・竹永と後藤佳菜(M1)が当たり、玉川剛司(別府大学文化財研究所)の協力を得た。なお本稿は以上4名と田中が協議して各自が成稿したものである。

基本層序 古墳群の造られた丘陵は阿蘇4溶結凝灰岩の堆積浸食により形成された丘陵である。基盤層はこの凝灰岩層が風化して軟化した土質である。現表土の腐植土層を第1層、その下の自然堆積層を第2層、盛土等の人為堆積層を第3層、基盤の凝灰岩層を第4層として、その層序の間に形成される人為的な面をアルファベットで記載した。(田中)

大久保1号墳(第4図)

これまでの調査により大久保1号墳の墳丘形態が前方後円墳であること、葺石の存在すること、後円部2段前方部1段の墳丘構造となること、後円部尾根側の周溝の存在、墳頂部の小円礫の存在などが判明し、墳長36mの規模が確定した。以上の調査では墳丘の外観は掴めてきたが、具体的な年代などが把握できる遺物の出土が見られなかった。そのため第5次調査では遺物の出土が見込める地点として、墳頂祭祀の可能性を想定できる後円部墳頂平坦面の調査を行った。その結果、僅かな土師器片と小円礫の露出が確認できた。今回はさらに精査した。

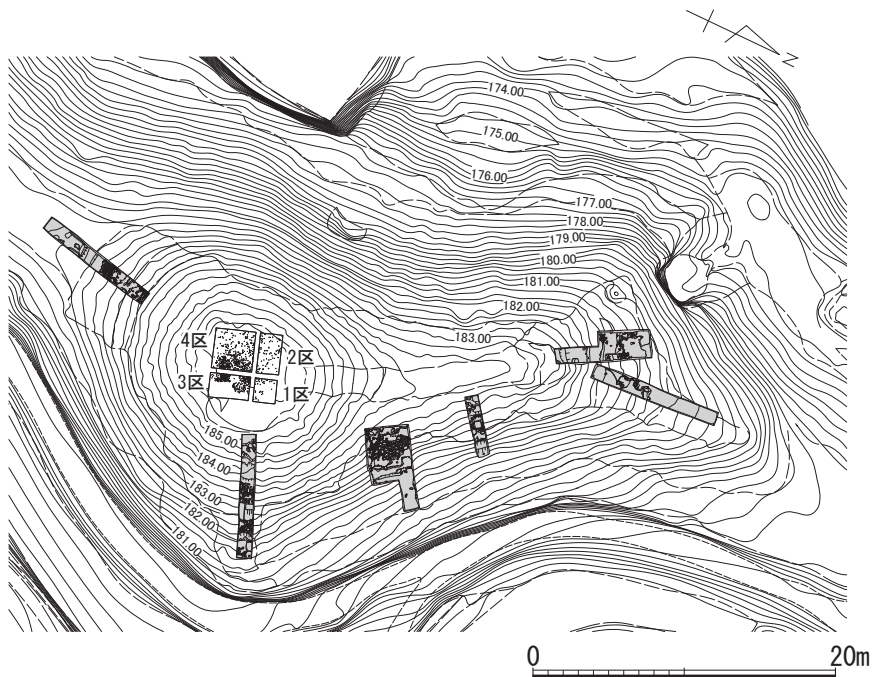
後円部墳頂調査区(第5図) 2015年度の第5次調査では、後円部墳頂の埋葬祭祀の痕跡と土師器の採集を目的として、前方部の中心軸を基準に、4.5m×4.5mの方形の区画の設定を行った。

その調査により各区から2~3cm大の小円礫が露出していたため、円礫の範囲を確認することを目的に、今年度も全体の掘り下げを行うこととした。1区や2区からの円礫の出土は僅かであり、3区と4区に特に密集して広がっていることが判明した。円礫の集積状態から、1号墳の主体部は3・4区付近ではないかとも想定される。また、遺物についても4区から5点と調査区で一番多くの土師器小片が出土した。

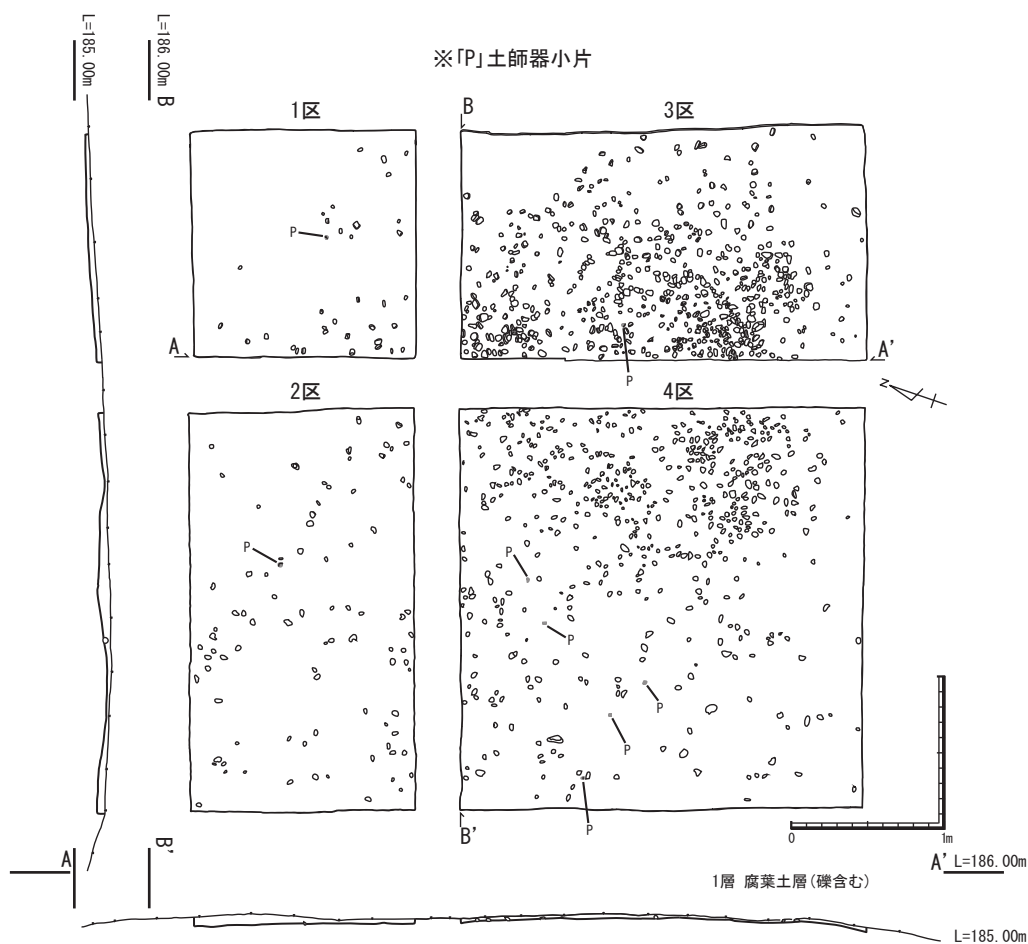
今回の第6次調査では、礫の広がりを確認するための掘り下げを行い、主体部の調査は行わなかった。また、調査区の平面実測、及び断面実測を行い、写真撮影を行った上で、埋戻しを行い大久保1号墳の調査を終了とした。

調査成果 今回の成果を加え大久保1号墳全体の成果報告を行う。①これまでの調査により、後円部墳端が確定しているが、大久保1号墳の墳長は36mとなる。②後円部では周溝が検出されたが、前方部側からの周溝の確認はできなかった。③墳頂部の3区と4区から小

円礫がまとまって露出。また礫の広がり方から主体部は埋没後の現状を維持していると推定される。④遺物としては土師器片が数点出土したが、墳頂上の墓上祭祀の様相を示したり、時期を特定できる遺物の出土は確認できなかった。(竹永)



第4図 大久保1号墳のトレンチ配置図(1/500) (玉川作成)



第5図 大久保1号墳 墳頂部平面実測図(S=1/50)

大久保3号墳（第6図）

2012年度末に行った第1次調査では、大久保3号墳の墳頂部に設定した第2トレンチにおいて、2枚に分かれた凝灰岩製の蓋石の一部が出土し、北側の1号墳に近い蓋石が後に開けられた痕跡を確認した。また、第2トレンチ南側では、墳端と考えられる立上りを確認した。これら前回の調査成果を基に、蓋石の棺身の確認及び、東西の墳端の確認を目的として、墳頂部に南北1.0m×東西7.2mの長方形の第3トレンチを設定した。掘下げの結果、トレンチ中央部に蓋石の一部が確認できたため、さらに南北に3.9m、東西に2.5mにトレンチを拡張し、蓋石の全体を検出した（第7図）。

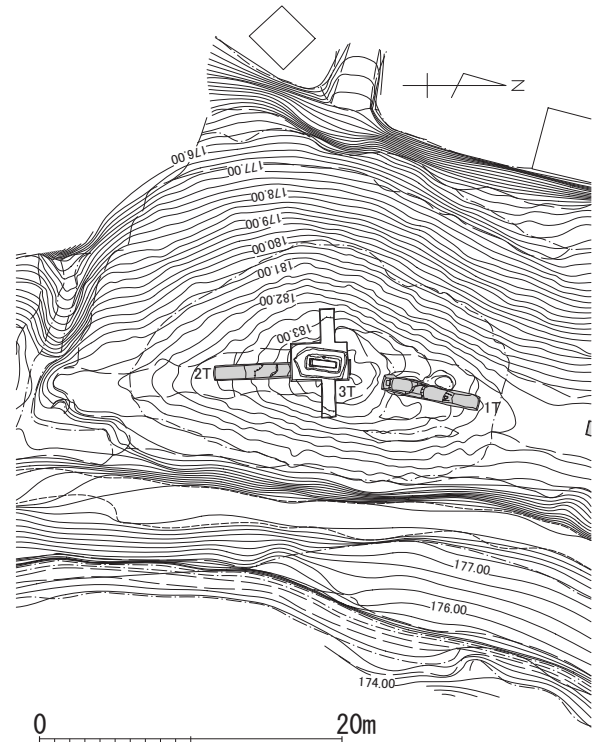
蓋石の周囲を精査した結果、墓坑は凝灰岩の岩盤に直接掘り込まれた全長3.45m、最大幅1.92mの南北に長いやや扁平な五角形を呈することが判明した。墓坑の底部は平坦ではなく、主体部周辺に幅0.32～0.70m、深さ0.14～0.30mの不安定な溝が巡る。これは蓋石の形に合わせて墓坑を掘り込んだためと考えられる（第8図）。

蓋石は硬質の阿蘇溶結凝灰岩製で全長2.25m、最大幅0.98mを測る。北側に2つ、南側に1つ、計3つの縄掛突起を持つ。北側の2つの縄掛突起は長さ5cm、幅12cm、南側の縄掛突起は長さ6cm、幅13cm、厚さ7cmを測る。赤色顔料に関しては第1次調査で確認されたように蓋石縁辺のみならず被覆土の周囲にも広がっている。裏面には主体部の形に沿って赤彩が見られ、その周囲には斑点状に残存している（第10図）。土層の堆積状況や赤色顔料の範囲から、割れたのではなく、はじめから2つを作り、小口が合わさるように加工したものと考えられる。北側から開けられたと考えられるが、人骨の出土状況からは追葬の有無は不明である。蓋石を除いたところ、主体部は石製の棺身ではなく、凝灰岩の岩盤を直に掘り込んだものであった。阿蘇溶結凝灰岩製の地山をほぼ垂直に掘り込んだ全長1.82m、最大幅0.47m、深さ0.42mの埋葬主体が確認され、蓋石と同様に底面・側面・小口面の全面に赤色顔料が塗布されていた。主体部南側は若干崩落していたが、ほぼ完全な状態で流土もなかった。床面は直線ではなく、中央に向かってやや湾曲していた。

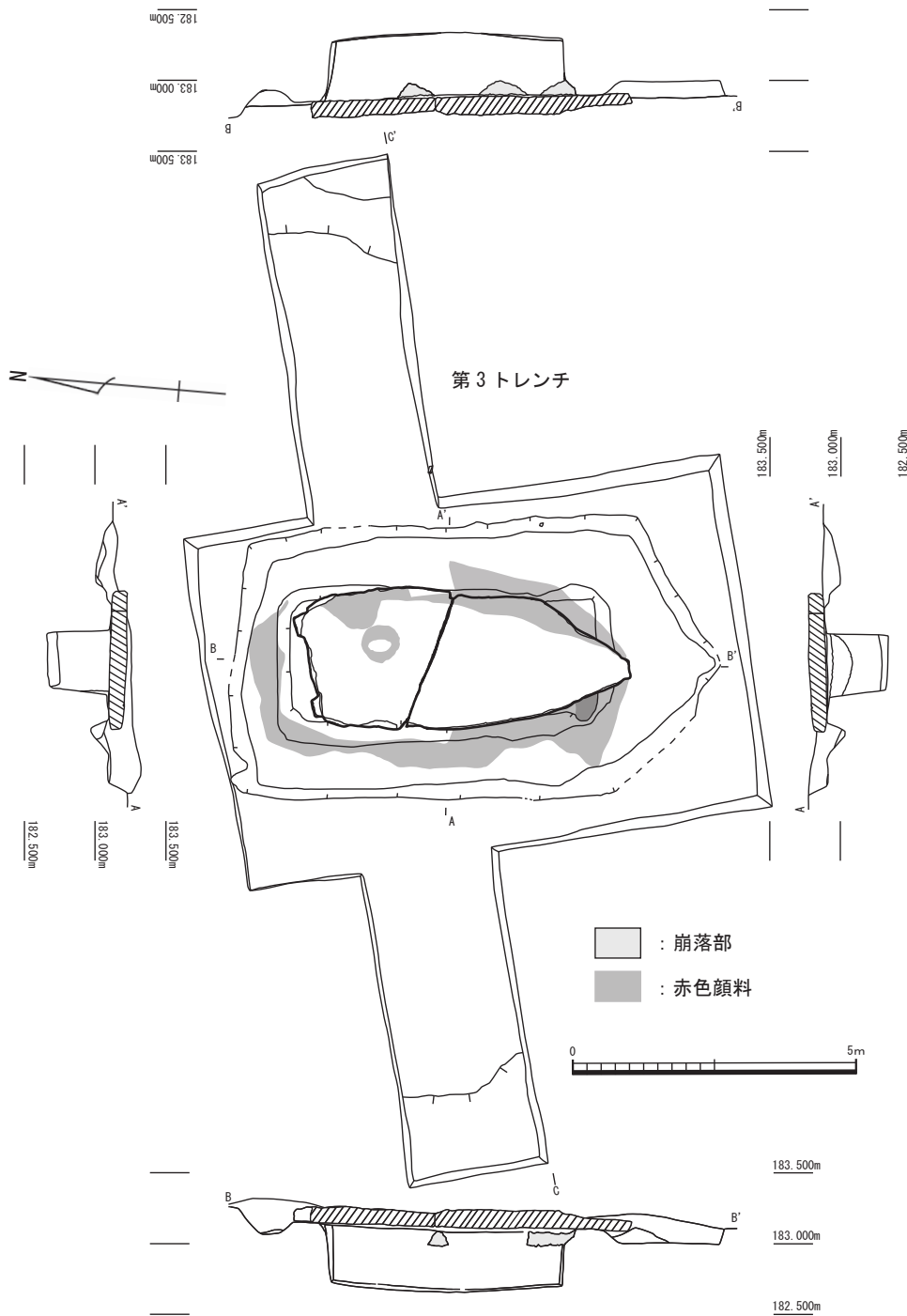
墓坑の内部に溝を巡らすことで主体部周辺を一段高く見せ、蓋石を際立たせるように作られたものと考えられる。墓坑周辺には赤彩があるが、北東部の墓坑には赤彩が残っていないため、ここから蓋石を片側より開けたことが推測される。

本来であるならば蓋石の北側に2つ付いている縄掛突起は対になるように南側蓋石に付けられるはずであるが、1つしかない。これは石蓋を加工した段階でその状態であったのか、元々加工されたときには2対の縄掛突起を持っていたが、石蓋を3号墳に運搬する最中に割れてしまったためであるのか、不明である。

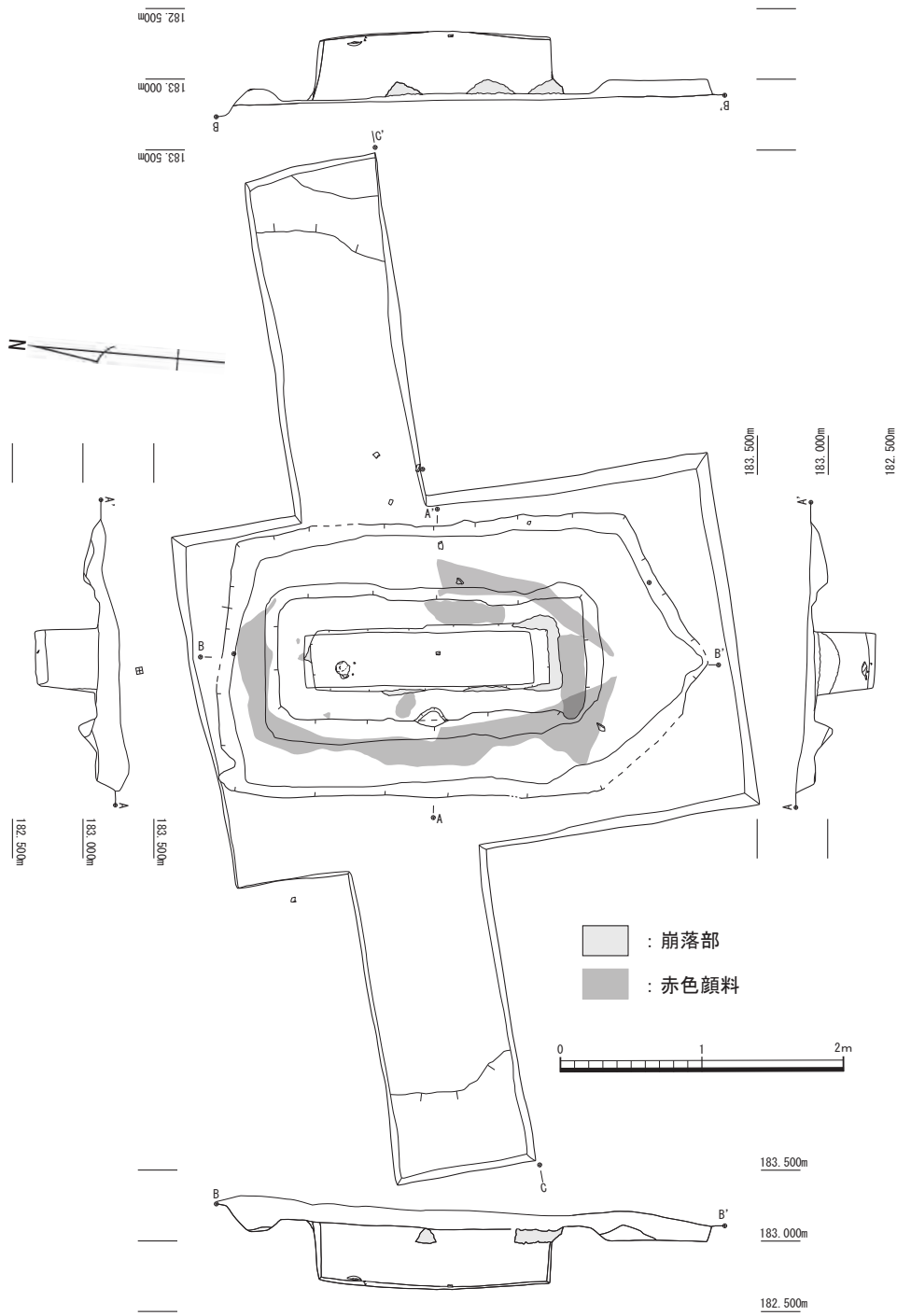
遺物は土師器が8点と人骨片が4点出土した。主体部内から土師器は確認されず、人骨片のみであった。土師器片は図化できないほど小片で、それらは掘方周辺から散在する形で多くは墳丘盛土より、一部床面直上から出土している。特に主体部東側より集中して見られた。人骨片は主体部から出土している。1つは頭蓋骨と思われるもので、主体部北側から出土した。その周囲には歯が2つ出土した。内1つはその形状から臼歯と推定される。主体部中央付近からは大腿骨の一部と思われる骨片が確認できた。このことから被葬者の頭位は北側に向けられていたと推測される。それ以外の人骨はなく、蓋石から推測された追葬人骨は確認できなかった。



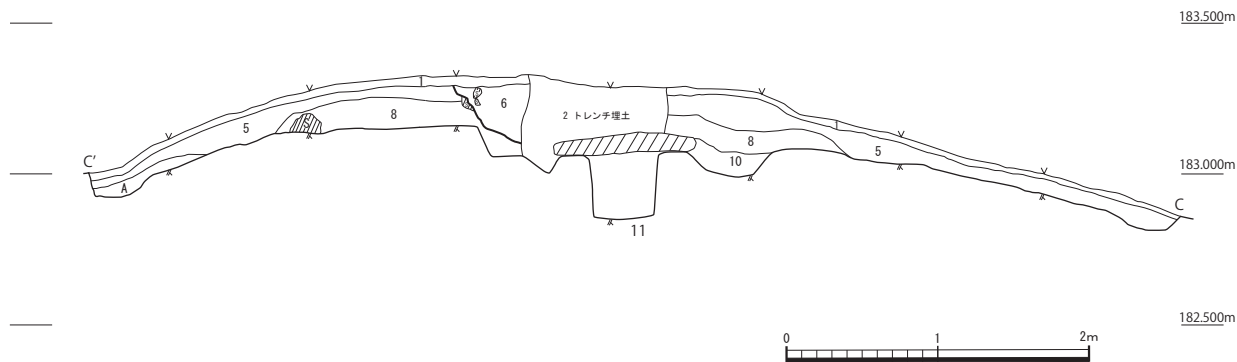
第6図 大久保3号墳 トレンチ配置図(1/500)
(玉川作図)



第7図 大久保3号墳、主体部石棺出土状況 (1/50)

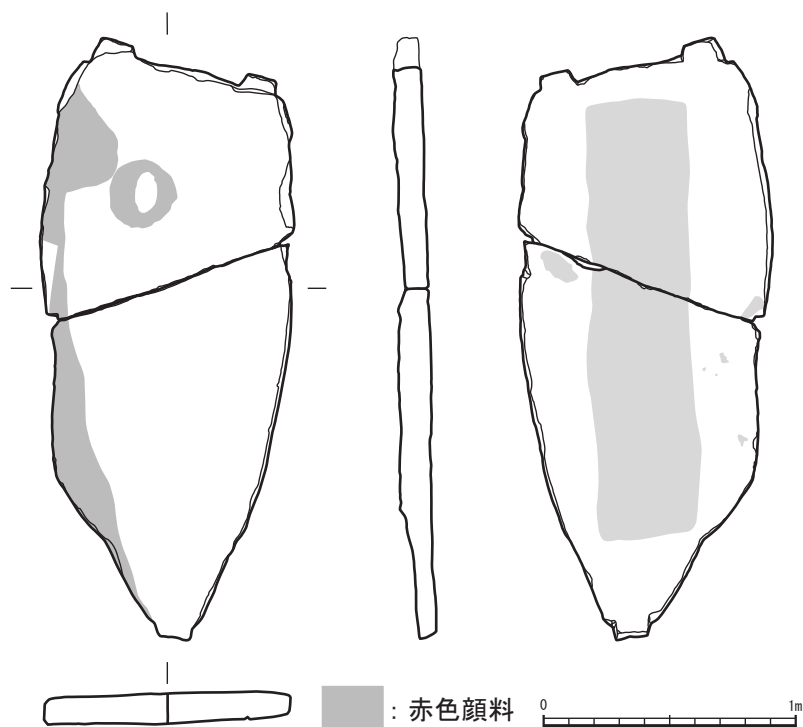


第 8 図 大久保 3 号墳完掘状況 (1/50)



- 1: 暗赤褐色土 (表土)
- 5: 暗褐色土 (流土 粒子細かい、2～3 cmの軽石を多量に含む、粘質ややあり)
- 6: 灰褐色土 (追葬埋土 2～3 cmの軽石を多量に含む、しまりややあり、粘質なし)
- 8: 黒褐色土 (初葬時盛土または封土 5 cmの軽石を含む、しまりややあり、粘質なし)
- 10: 暗褐色土及び赤褐色土 (初葬時埋土 粒子細かい、バサバサしている、赤色顔料がにじんでいる)
- 11: 灰褐色 (地山 凝灰岩の岩盤)
- A: 暗褐色土 (攪乱 2～3 cmの軽石を多量に含む、バサバサしている)

第9図 大久保3号墳 土層断面図 (1/50)



第10図 大久保3号墳主体部蓋石実測図 (1/30)

調査成果 今回の調査によって大久保3号墳の主体部は、凝灰岩の岩盤を切り抜いた石蓋土坑であることが判明した。また埋葬終了後盛土をおこなっていったん墳丘が完成したのち、主体部上位から掘り込んで、蓋石1枚を開けていることが判明した。いっぽうで特異な点も指摘できる。蓋石には3か所の明らかな縄掛け突起がしつらえられていた。また主体部内部の人骨片を見る限り、二人目の埋葬の痕跡はなく、棺蓋の状況とは矛盾した。また副葬品はなく、墓坑埋土中の土器片も少量で土器から年代を推定するのは困難であった。(高木・塩見)

まとめ

今回の調査によって、大久保1号墳の後円部墳頂平坦面には、小円礫が全体に置かれていることが判明した。平坦面の中央部に円礫が集中する観察され、埋葬主体部の位置を暗示するものと考えられる。さらに6次調査の直後に行った地下レーダー探査によれば、やはり中央部に1か所反射の弱い部分があり、対応するものと推定される(1)。しかし墳頂平坦面においても土師器の出土は極めて少なく、当初意図した年代判定のできる土器資料についてはわずかな手掛かりを得たに過ぎなかった。

大久保3号墳については、なによりも意外だったのは蓋石の下に箱形石棺の棺身が存在すると考えていたのに、身が直接地山である凝灰岩の岩盤を削り抜いたものであったことである。通常「石蓋土坑墓」と呼ばれるものであるが、蓋石に縄掛け突起があることと赤色顔料による円文が描かれている点から、通常の石蓋土坑墓ではないことは明らかである。

さらに3号墳の主体部がこのようであったため5次調査で同じように棺身が発見されなかった大久保2号墳の中心主体も岩盤に棺身を掘り込み、舟形石棺の蓋を直接かぶせたものと判断された。大久保2号墳の例はかつて高木恭二氏が「舟形蓋土壙」あるいは「舟蓋土壙」と呼んだものである(2)。いまのところこのような古墳の地山の岩盤に直接主体部を掘り込み、その上に大久保2号墳例のように舟形石棺の石蓋を載せる例は、高木氏が指摘した熊本県山鹿市菊鹿町灰塚古墳と同県宇土市の西潤野1号墳で知られており、大分県では初めての例となる。肥後地方の古墳文化との関係を示すものである。また3号墳の主体部は断面土層の状況と蓋石周辺の赤色顔料の散布状態から、北側蓋石を再度開けていることが明らかであったが、内部には追葬者にあたる人骨の残存の可能性は低く、再開棺は必ずしも追葬のためではないことが考えられた。大久保3号墳の主体部では人骨の保存状態がよくないので、土層観察と石蓋の状況から推察された棺蓋の再開棺が追葬であるのか、田中良之氏が説いた5世紀後半に出現する骨化後断体を目的とした開棺であるのか、明確には判断できなかった(3)。

なお大久保3号墳のように箱形石棺に利用される平たい蓋石に縄掛け突起が削り出されている例は、県内では豊後大野市三重町鉢ノ窪3号石棺の同一墳丘上に隣り合って並列する箱形石棺の蓋石にもある。県外では福岡県飯塚市鹿毛馬のきょう塚古墳の主体部箱式石棺の蓋石と、同じく飯塚市川津の川津1号墳にも認められる(4)。この3例はいずれも、共存する舟形石棺や出土須恵器から中期後半の古墳と考えられている。おそらく中期中葉以後に普及した舟形石棺の縄掛け突起が、同時期に作られていた凝灰岩製の箱形石棺の蓋石に模倣されたものと考えられ、大久保1号墳と3号墳の築造時期を中期中ごろから後半と推定する根拠となるものと考えられる。今後は土器の整理をとおして、以上のような時期推定を検証していきたい。(田中)

なお漆生古墳群の調査は日本学術振興会科学研究費助成事業(基盤研究 B)「阿蘇地域を中心とした古墳時代の九州島における情報伝達、文物交流の実証的研究」(研究代表者:杉井健 課題番号 26284122)の成果の一部である。

註

- (1) NPO 法人 i さいと地中探査研究所によって、2017年1月29日に実施された。
- (2) 高木恭二 1994「九州の縄抜式石棺について」『古代文化』46-5 古代学協会
- (3) 田中良之・村上久和 1994「墓室内飲食物供献と死の認定」『九州大学文学部九州文化史研究紀要』39
田中良之 2008「断体儀礼考」『九州と東アジアの考古学』九州大学考古学研究室 50周年記念論文集
(両文ともに、田中 2017『骨からみた古代日本の親族・儀礼・社会』すいれん舎に収録)
- (4) 嶋田光一ほか(八木健一郎執筆分) 2016「古墳時代」『飯塚市史』上巻 p238、p259

漆生古墳群調査写真図版1



遠景



1号墳墳頂



1号墳墳頂



3号墳主体部検出状況



3号墳石棺蓋



3号墳主体部墓坑



Ⅲ 坊ノ原古墳

1 調査の経過

大野町桑原区の標高約 250mの丘陵上に所在する前方後円墳で、平井川の支流である向原川沿いの谷底平野を見下ろす立地環境である。同じ向原川流域には1.5km 南西に所在する円墳の向原古墳のほか、尾崎横穴墓群・下尾峰横穴墓群・嘘ノ谷横穴墓群などの遺跡が点在する。古墳時代の集落跡は500m南東の加原遺跡で確認されている。

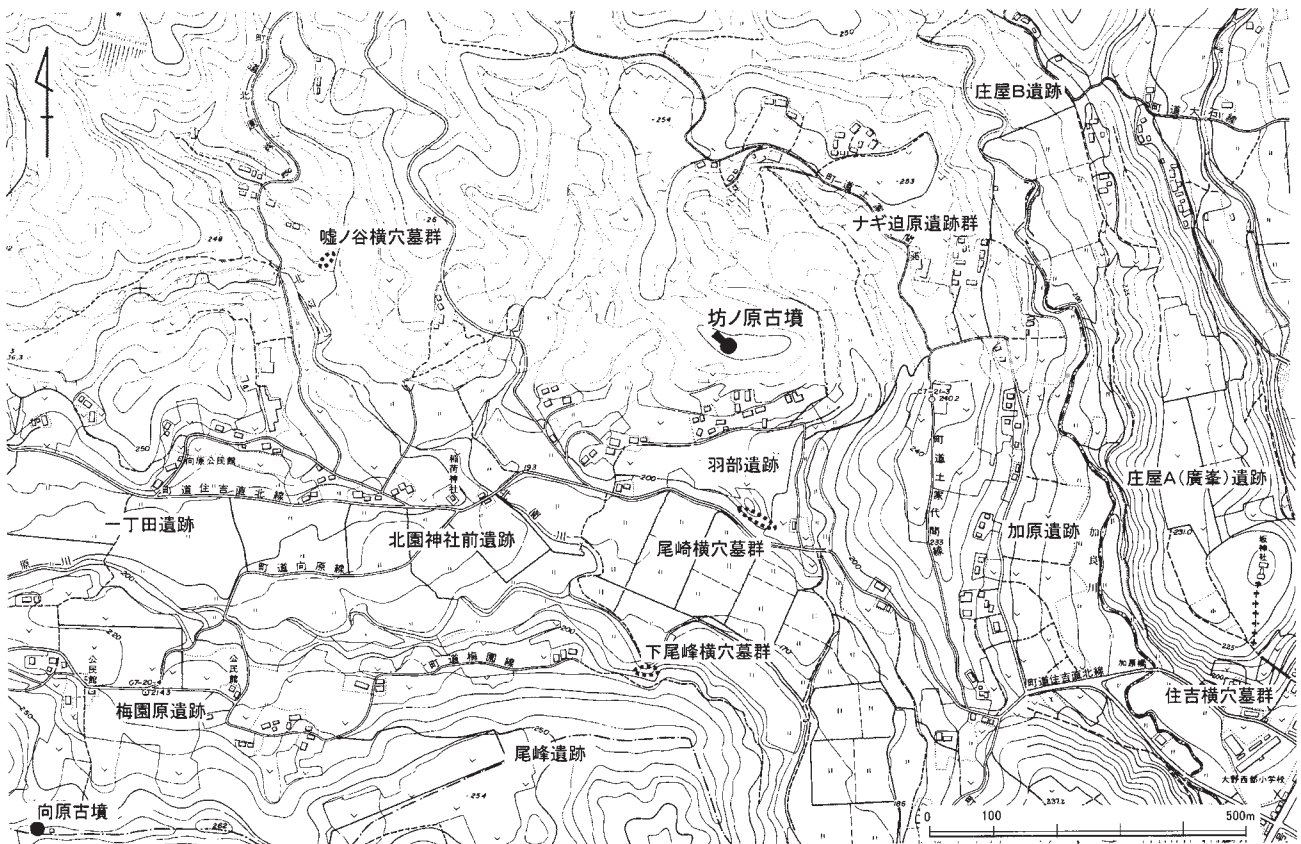
昭和51年に測量調査が行われて全長45mの前期古墳と推定される墳丘形態であることが確認されており、同年には大分県指定史跡となっている。(清水 1977)

平成26年度より範囲確認調査に先立って詳細な墳丘測量を実施し、最初の測量時と同様の柄鏡形の墳丘形態と、後円部の一部に段築らしい平坦面や、墳丘北側に墳端テラスと推定される地形が確認されている。(玉川 2016)

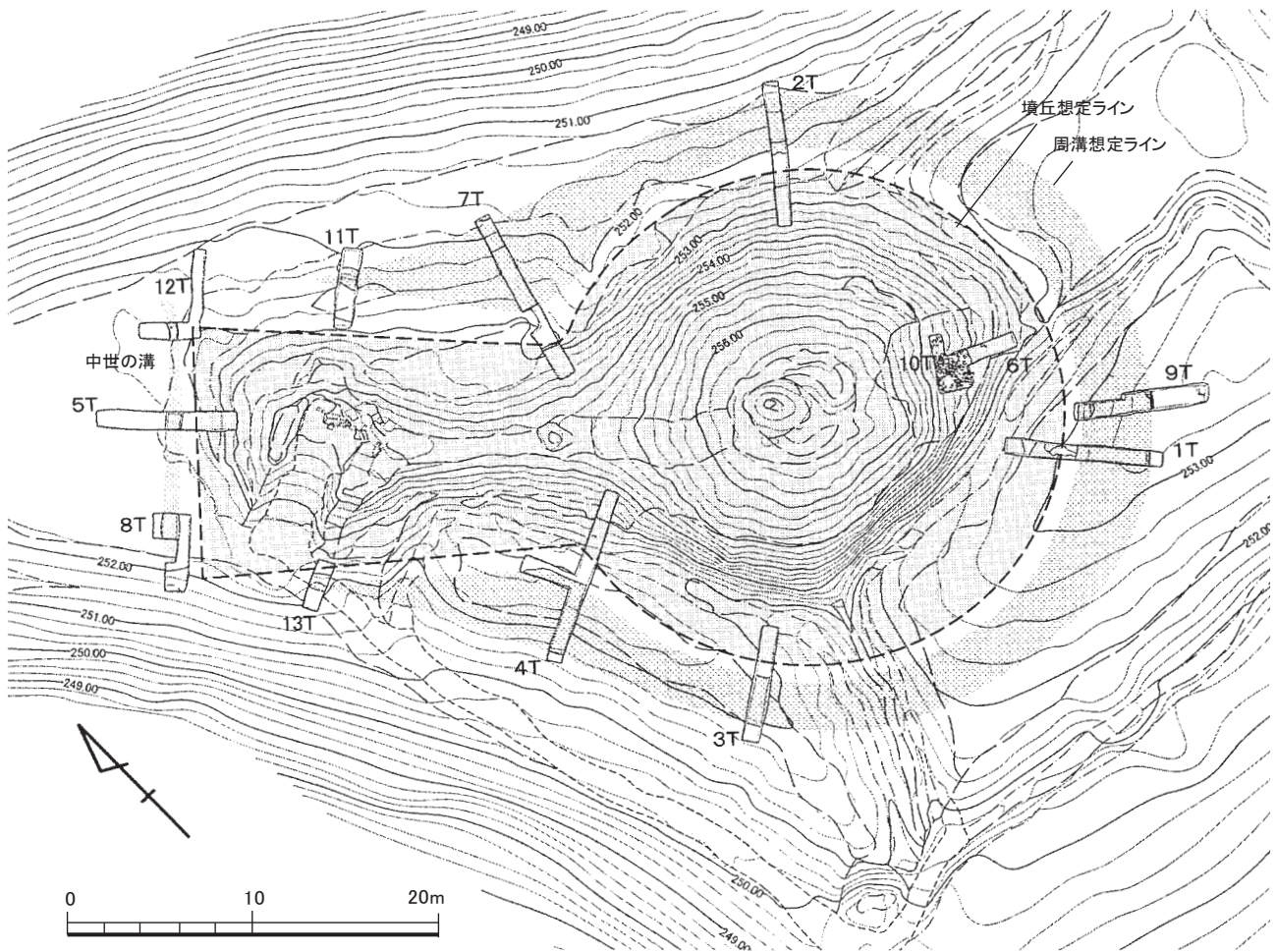
また、前方部には主体部の石棺材と伝えられている石材があり、安山岩質の板石3枚のうち2枚には側面の一部に加工調整痕が確認でき、箱式石棺の一部と推定される。(井 2016)

平成 27 年度は墳端等にトレンチを計8箇所設定して確認調査を行った。葺石とみられる礫が第6トレンチの後円部墳丘上以外からは確認できないこと、第1トレンチの周溝外側の土層が盛土状に観察できたことから周堤の可能性が考えられたこと、前方部隅角付近の周溝が不明確であること、遺物出土量が少なく築造時期の手掛かりに乏しいことなどにより、遺跡範囲や築造時期の把握には不十分であったため、翌年度に継続して実施した。

平成 28 年度の2次調査については5箇所の特レンチ(第9～13 トレンチ)を設定した。第9トレンチは第1トレンチの周溝外側の確認、第10トレンチは第6トレンチの礫群範囲の拡張、第11・13トレンチは前方部左右端の周溝の把握、第12トレンチは前方部隅角の確認で、1次調査の未確認部分を対象とした。



第 11 図 坊ノ原古墳周辺地形図



第12図 坊ノ原古墳調査トレンチ配置図(玉川氏作図に加筆)

2 確認調査の概要

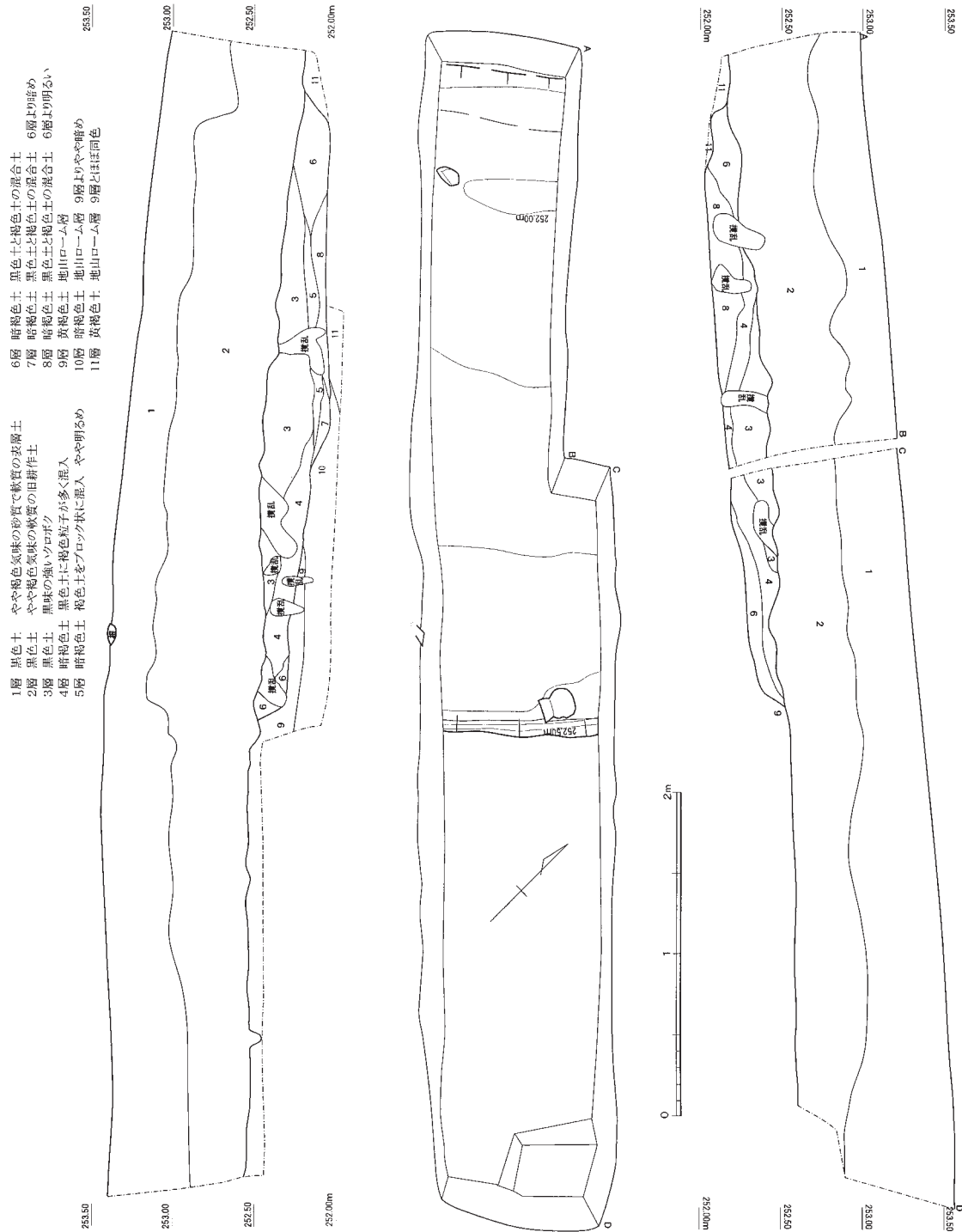
第9トレンチ 後円部南東側の第1トレンチに隣接する位置で、墳裾を掘削して長方形に区画されている山林内である。周溝外側の確認を目的に長さ7.4mに設定し、地表の樹木を避けるようにして掘り下げを行った。

表土から深さ80~90cmもの表土や攪乱土層が堆積しており、その下層より周溝を検出した。幅は4m、検出面からの深さは40cm、溝底は中央付近から墳丘側にかけて標高252.1m程を測り、外側に向かってわずかに傾斜するが断面は逆台形状である。溝底の標高はやや高まっているが、堆積土の状況も含めて第1トレンチとほぼ同様の状況で検出した。

なお、第1トレンチでは周溝外側の立上りの土層の色調がやや暗く、土質が混合土とも判断できる軟質で観察できたため周堤の存在も考えられたが、今回の調査区では南側壁面沿いにサブトレンチを5.3mの長さで設定したところ、地山層であることが確認できた。盛土とも観察されていた10層(第1トレンチの8層)の上に9層のローム層(第1トレンチの7層)があり、今回9トレンチでの周溝外側の立上りが9層中で10層まで掘り込まれていないことから、10層は盛土ではないと判断した。通常より軟質で暗い色調であるが地山層と判断できるため、周堤の痕跡ではないと考えられる。

また周溝内より4世紀代の時期と推定される土師器甕(第18図1)が出土している。また、拳大の礫1点のほか、小礫がいくつか検出されているが、葺石とみられるほどの出土量ではなかった。

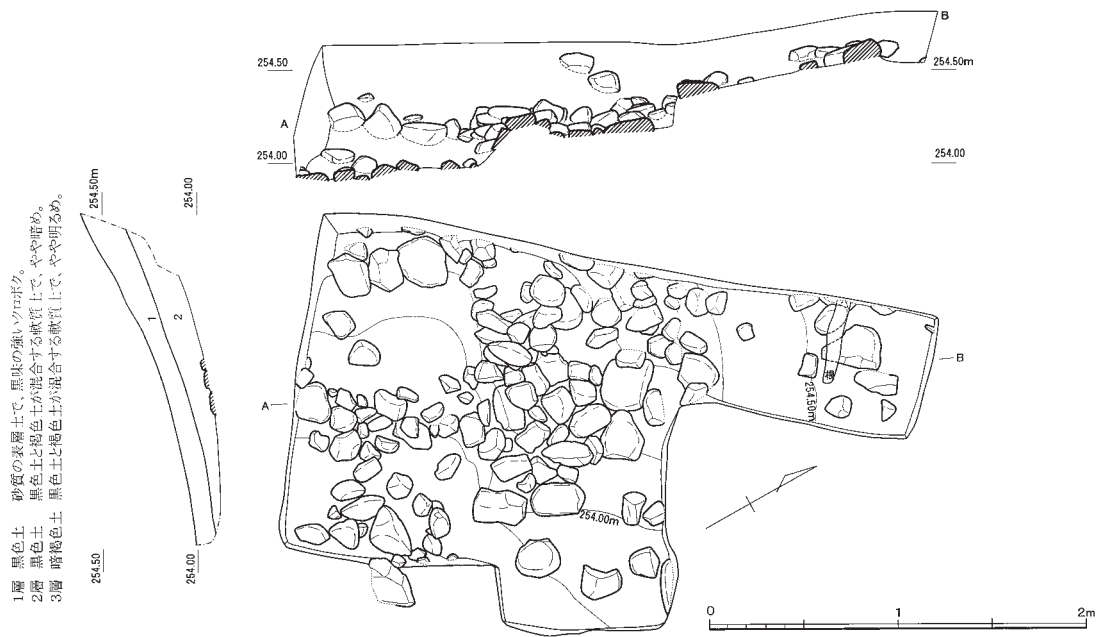
第10トレンチ 第6トレンチで礫を多量に検出した上部を南北方向に1m拡張するように設定した。後円部東側墳丘上で、傾斜面が緩やかで段築テラス状の地形が確認できる唯一の位置でもある。



第13図 坊ノ原古墳第9トレンチ実測図

第6トレンチと同様に段築の可能性のある緩やかな傾斜面で礫群の広がりを検出した。礫は拳大から人頭大程の河原石が集められており、葺石とも判断できる石材である。しかし墳丘表面に均一に敷かれる葺石とは異なり、トレンチ南東側の窪みなど複雑な段差があり、大きく乱されたような状況で検出した。墳丘上に溜まった転落石、または様々な要因で位置が動かされた可能性も考えられるが、葺石とは判断できない配置状況である。

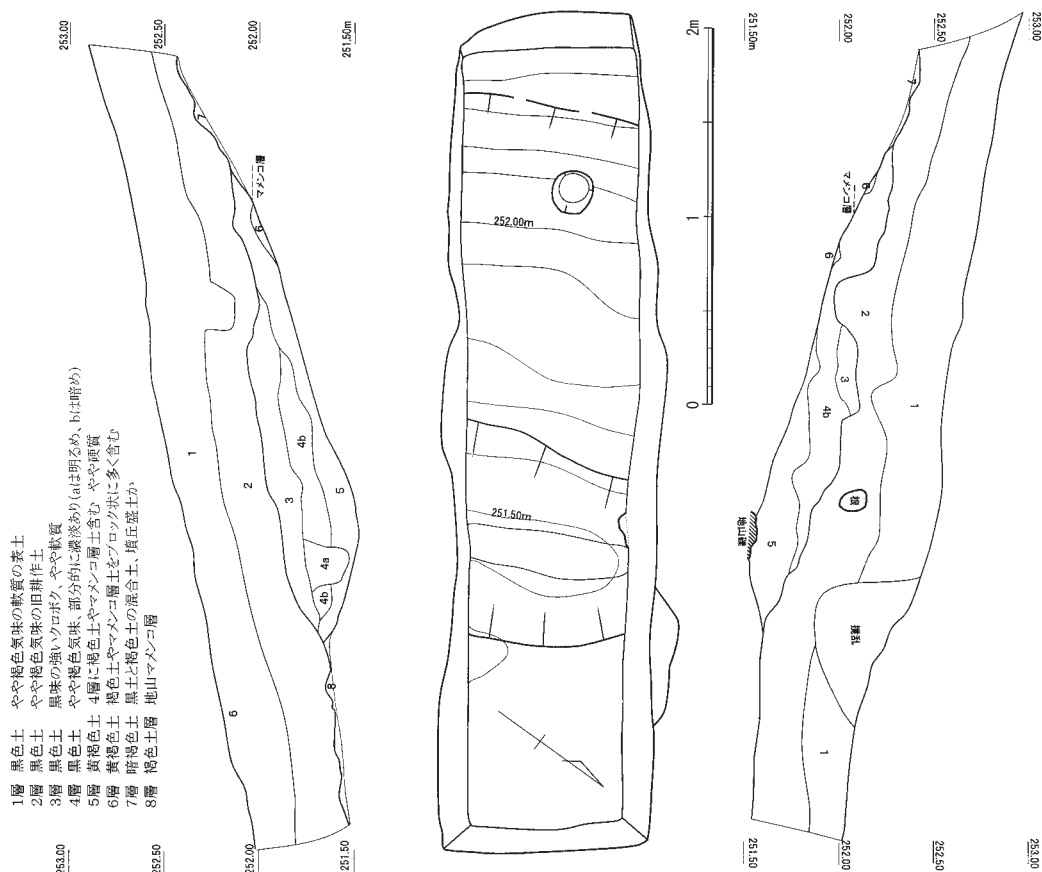
出土遺物について、中世の土師質坏(第18図2)が出土されている。測量時でも中世の土器片が採取されており、古墳時代の遺物は全く出土していないことから、中世の集石遺構である可能性が高い。



第14図 坊ノ原古墳第10トレンチ実測図

第11トレンチ 位置は前方部北側の傾斜地である山林内で、ほぼ築造当初の地形と思われる。第7トレンチより前方部側延長上の墳端検出を目的に長さ4.4m、幅1mで設定した。

周溝と思われる遺構が中央付近で幅1m程で検出したが、黒味の強い黒色土(3層)とその下部(4層・5層)の範囲が周溝の土層と考えられる。幅は2.6m、溝底の標高は251.50mで、地山面はローム層より下層のマメンコ層まで掘込まれている。検出面からの深さは40cmで、溝の断面は約20°傾斜する緩やかに窪む皿状となっており、周溝外側でわず



第15図 坊ノ原古墳第11トレンチ実測図

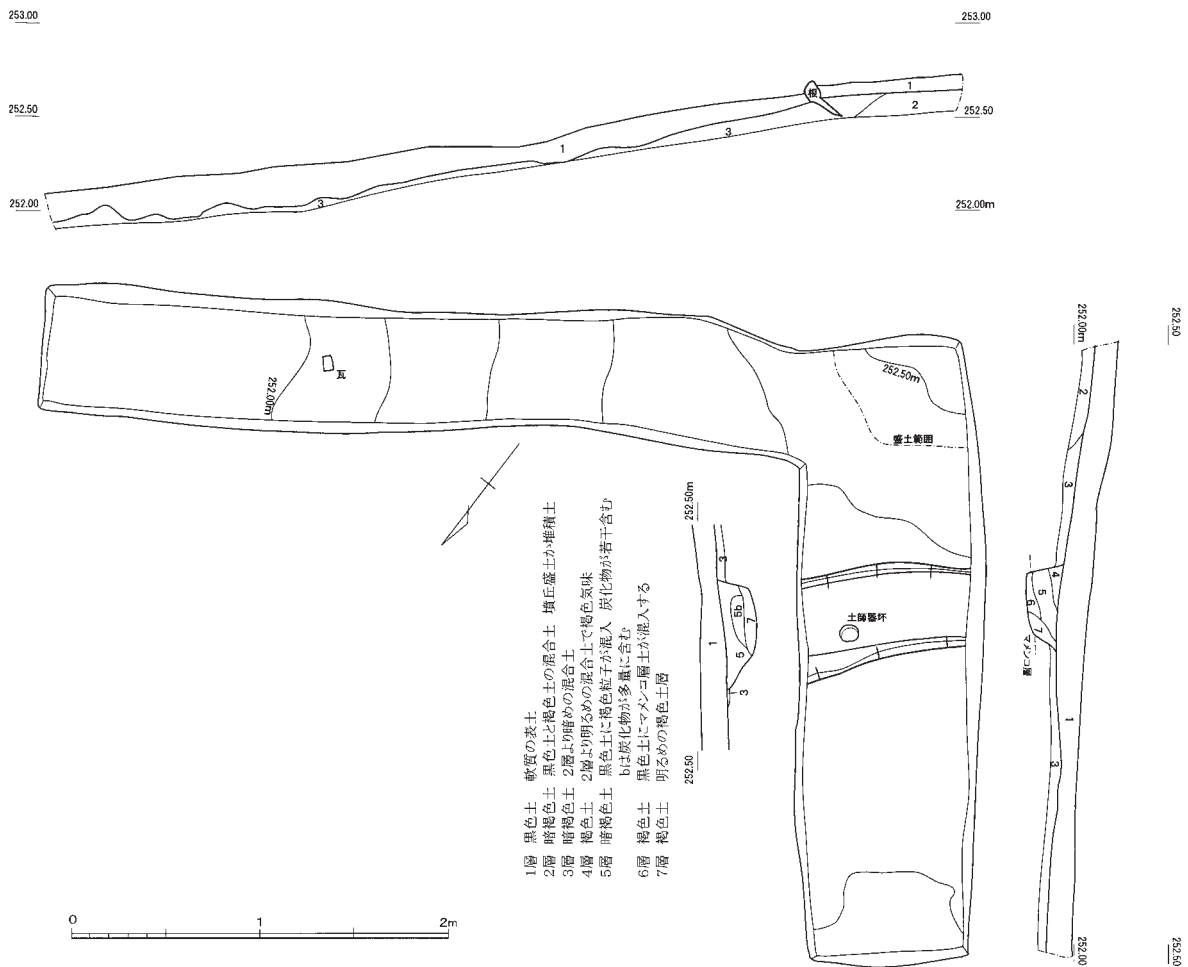
かに立上って攪乱層で失われている。第2トレンチや第7トレンチと同じく、自然地形に沿うようなかたちで掘り込まれていると思われる。位置的にも第7トレンチから続く周溝の延長と考えられるが、深さは浅く幅も狭まっており、後述の第12トレンチまでは続かないことから、前方部側面程度で周溝が途切れるものと思われる。墳丘側の周溝内で柱穴状の遺構が検出されているが、葺石と思われる礫も見られず、遺物は全く出土していない。

第12トレンチ 第11トレンチと同じく北側へ傾斜する山林内で、築造当初の地形を残すと思われる位置である。前方部南側隅角の墳端及び第5トレンチの溝の延長を確認する目的で、樹木を避ける形で東西に長さ4m幅1m、南北に長さ3.5m幅0.7mでL字状に設定した。

トレンチ南隅で表土の下に黒色土と褐色土の混合土を検出し、前方部隅角の墳丘盛土層と思われる。葺石等も検出できないが、ほぼ隅角状の範囲であり、前方部の北側隅角と考えられる。

溝状の遺構を検出し、位置的にも第5トレンチの溝に続く延長の位置でもあることから同一遺構と考えられるが、幅は約0.5m前後とやや狭まっている。検出面からの深さは0.2m程の断面逆台形状で、溝底の標高は252.2mで、南側はマメコ層まで掘り込まれている。なお、溝はやや北側へ向きを変えて傾斜面へ続く様相のため、第11トレンチの周溝とは続かないことが判明した。また、溝遺構内より土師質の坏(第18図3)が検出され、古墳の周溝ではなく中世の遺構である可能性が高い。

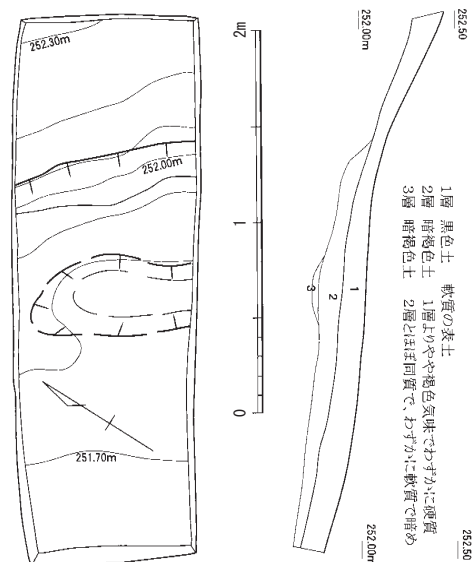
遺物は他に表土層より瓦片が出土しており、前方部前端の平坦地は造成によるとみられることが指摘されているが、中世以降に建物などが存在した可能性が考えられる。



第16図 坊ノ原古墳第12トレンチ実測図

第13トレンチ 前方部南側の傾斜する林道上の位置で、前方部南側の墳端検出を目的に長さ2.8mで設定した。11トレンチの南側に対応する4トレンチの周溝の延長する位置を把握する目的で設定した。墳丘側の表土下に墳丘盛土層と思われる土層を検出したが、葺石と思われる礫は検出していない。

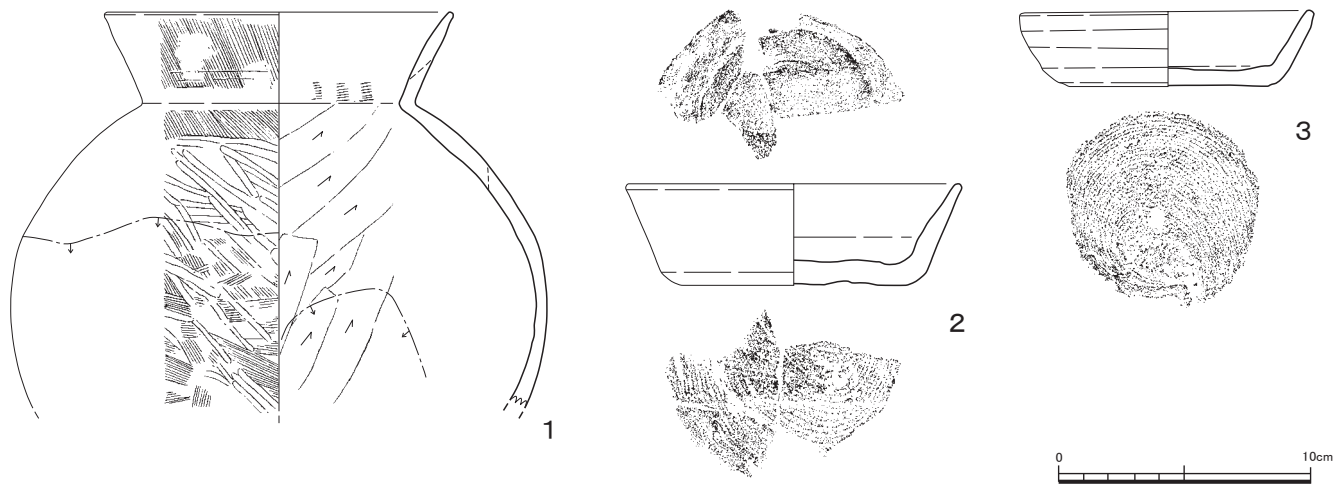
地表面の墳端より外側約2m離れた位置で溝状の掘込みを検出した。溝はローム層及びその下層のマメンコ層を掘り込んであり、溝幅は90cm、検出面より深さは35cm程の小規模である。断面逆台形状で、覆土は褐色土が多く混入する覆土の堆積があり、溝底の標高は251.94mである。黒色土層は見られないなど、他のトレンチで検出した周溝とは規模や土層など様相はやや異なるが、位置的に南側周溝の端部の可能性もある。遺物も全く検出していない。



第17図 坊ノ原古墳第13トレンチ実測図

出土遺物 第18図1は第9トレンチ周溝内より出土した土師器甕で、単口縁壺に近い形状であるが、内外面に煤が付着しており甕と考えられる。胴部は球状で外面にハケ目の後に磨き、内面には篋削りがある。古墳時代前期後半の時期と推定される。

2は第10トレンチ、3は第12トレンチの溝上層付近より出土している中世の土師質の坏で、底部には回転糸切の痕跡があり、時期は14世紀と思われる。3は胎土に雲母を多量に含み、朝地町周辺地域に分布する特徴のものである。



第18図 坊ノ原古墳出土遺物実測図

3 まとめ

昨年度の第1次調査と併せて各トレンチ調査の結果、周溝は前方部の前端には設けられていないことが確認できた。1次調査では墳丘全周囲に巡らせているとも考えられたが、前方部前端側の溝は周溝とは接続しないことや、中世の遺物を伴うことから中世の遺構である可能性が高い。従って周溝は後円部から前方部側面までの範囲で馬蹄形状に設けられたものと考えられる。溝底部の標高については1次調査でもみられたとおり、後円部南東側の主軸付近がやや高めである以外は水平に近い高さに揃えて掘り込まれているが、墳丘北側より南側がわずかに低く高低差があることから、測量調査で指摘されているように向原川沿いの平野からの側面観を意識した築造とみられる。

墳丘構造について、各トレンチから散発的な出土のみで転落石も確認できず、葺石は全く検出できなかった。墳丘測量調査の際には地表面上に礫の存在が確認でき、葺石に覆われた墳丘との予想を覆す結果であった。唯一検出できた第6・10 トレンチの礫群は、石材自体は葺石とも判断できるものではあるが、配置状況や出土遺物から中世の遺構とみられる。段築らしい地形が観察されていたが後世の掘削による可能性が高く、従って段築の有無については不明である。今のところ後世の抜取り、あるいは第6・10 トレンチの遺構に再利用という可能性も否定できないが、葺石を伴わない古墳であったと考えられる。

墳丘復元は墳丘盛土の範囲確認による推定であるが、崩落による堆積や流失等も考えられるため当初の墳端かどうかの判断は慎重を要するが、第 12 図のとおりに測量調査時の所見にはほぼ沿った値で、後円部径は 27m と推定される。前方部前端の位置について、第 12 トレンチで確認できた盛土状土層によると、第5トレンチの確認位置より若干外側の位置になるが、前端西側の造成による掘削の可能性も考えられる。そのため前方部長は測量の所見より1m長く、全長は 46m と推定される。

なお墳丘と周溝の間に1～2m程の間隔があり、墳丘土が流失した可能性も推定されるが、墳端周囲をテラス状平坦面に囲まれた墳丘構造であったと考えられる。市内の三重町域の前方後円墳で確認されている特徴として知られており、同じ構造であることが考えられる。

築造時期について、埴輪は出土しなかったが1次調査の高坏や第9トレンチの土師器甕の出土により前期後半の築造とみられる。

参考文献

- 清水宗昭 1977「坊ノ原古墳」『大野原台地の遺跡 大分県大野原地区土地改良事業関係遺跡群予備調査概要Ⅱ』大野町教育委員会
- 賀川光夫 1980「坊ノ原古墳と御塚古墳」『大分県史大野町史』大分県大野町史刊行会
- 『橋爪文夫文集 大野町の歴史と文化財』大野町文化財委員会
- 玉川剛司 2016 「坊ノ原古墳墳丘測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書6』豊後大野市教育委員会
- 井大樹 2016 「坊ノ原古墳の石棺材」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書6』豊後大野市教育委員会
- 諸岡郁編 2017 「坊ノ原古墳」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書7』豊後大野市教育委員会



坊ノ原古墳遠景



墳丘近景



調査風景 (9T)



調査風景 (10T)



調査風景 (11T)



調査風景 (12T)



調査風景 (13T)

IV 丸山古墳

墳丘測量について

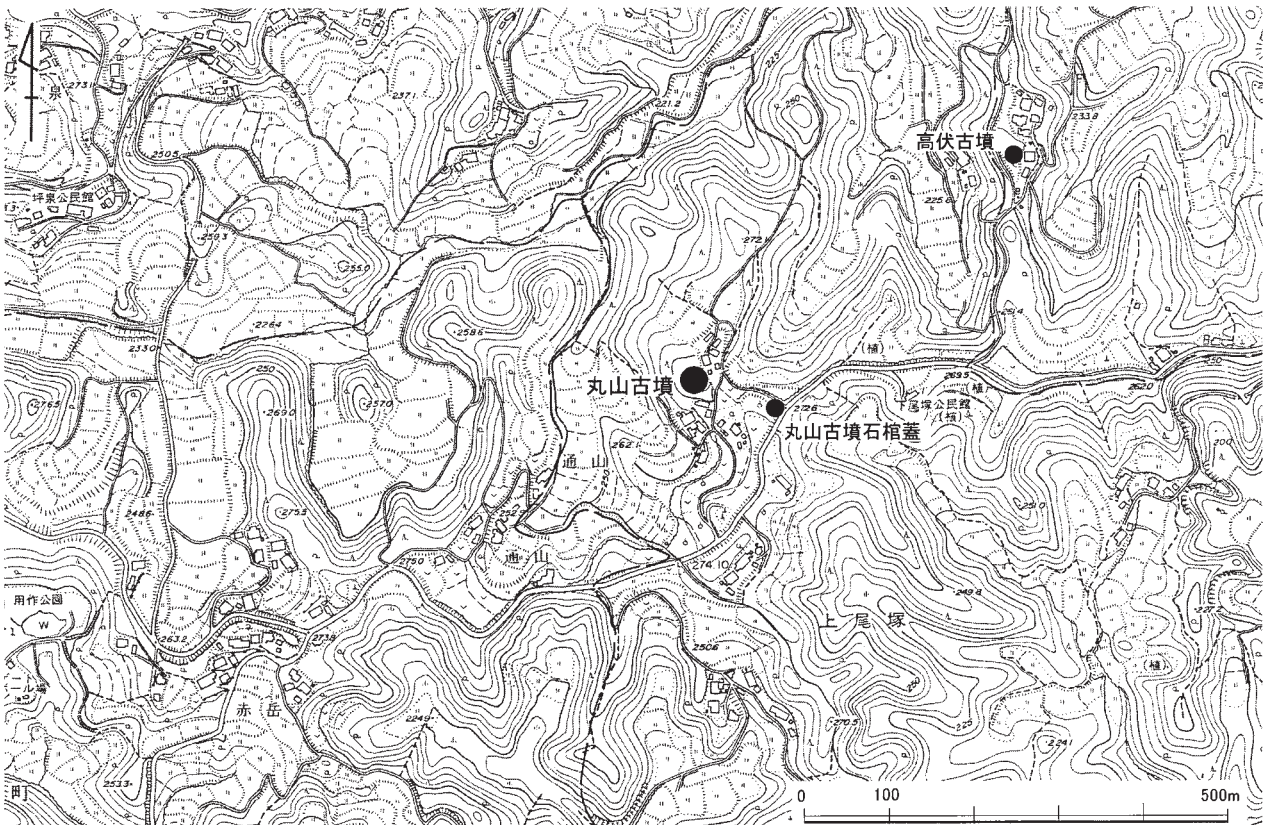
朝地町上尾塚の東西に長く伸びる尾根状の丘陵上に立地し、標高は約 280mで、周辺の丘陵を見渡せる小高い位置でもある。周囲は宅地等による掘削のためか、墳丘のみ取り残されたように保存されているが元々尾根地形上の一際高い頂部に築造されていたと思われる。なお、丘陵地形東方には若宮古墳・高伏古墳、西方には早尾原古墳など多くの古墳群が点在している。

古くから存在は知られており、地元では丸山長者の墓地として伝えられている。「朝地町史」では帆立貝式墳とも判断されるような見取図と、墳丘構造や表面観察について記述があり、市内でも有数の大型円墳として市史跡指定されているものの、詳細な図面等の資料はなかったため測量調査を行った。

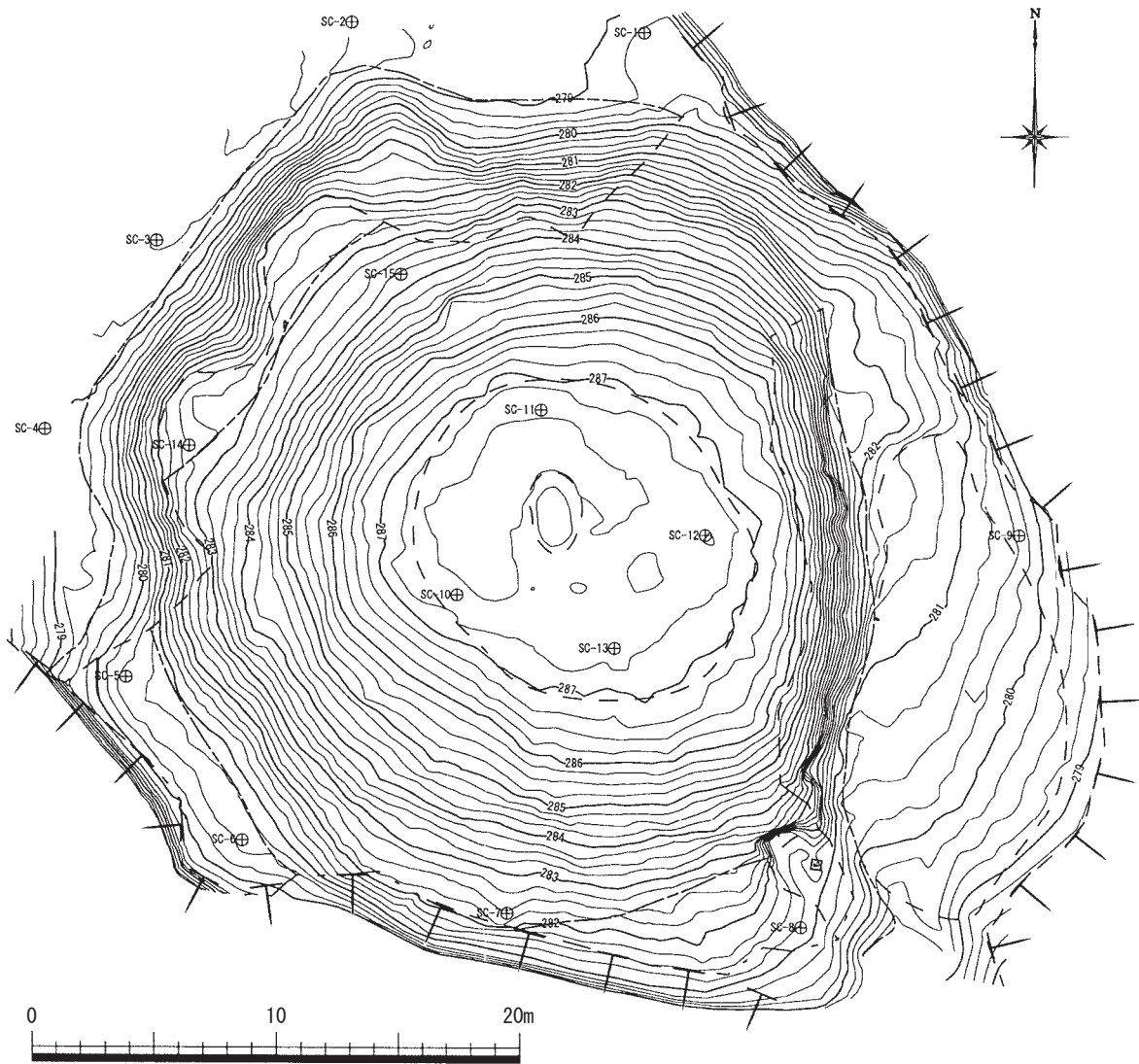
墳丘はほぼ円形状の地形を測れるが、周囲が掘削による急傾斜に囲まれて特に墳丘東側は畑の造成により削平を受けている。墳端についてははっきりしないが部分的に残されている可能性があり、墳丘南側は 282m、南西側は 281m、北西側は 283m付近の標高で、やや高低差があるが、傾斜地形が変化する位置として確認できる。いずれも葺石らしい円礫を観察できるうえ、この付近までほぼ円形に等高線が廻っていることから墳丘の一部ともみられ、径・高さ共に町史の記述より大きく超える規模になるとと思われる。

墳頂部は東西径 14m、南北径 13m程の平坦面があり、中央には長辺 3.5m、短辺2m、深さ 0.5mほどの楕円形状に窪んでおり、町史に記述とおりの盗掘坑と思われる。

しかし形態や規模などについて朝地町史とは異なる点もあり、近年の掘削や段築の可能性等も考えられる。墳頂の盗掘坑付近を中心として、標高 281～283mの傾斜変換付近を円形に辿るように推定して、径 32m、高さ 5.5mの規模の円墳と考えられる。北方向に向けた方形状の張り出すような地形が見受けられ、朝地町史の記述にある造出しの痕跡という可能性もあるが、凝灰岩の地山岩盤が露出し、墳丘かどうかの確認は困難であるため、現状では円墳とみられる。周溝も不明である。



第 19 図 丸山古墳周辺地形図



第 20 図 丸山古墳墳丘測量図 (1/300)

主体部の手掛かりとして、丸山古墳より出土したと伝わる石棺蓋が、墳丘の 100m 南東側の市道南部幹線沿いの崖面に立て掛けられている。盗掘の経緯等は不明であるが、長者伝説に因む銭箱の蓋石とされて通称銭蓋石とも呼ばれている。棺身については何も伝えられてなく不明である。天保2年(1831)の紀行文に現在の位置に安置されている記述があり、江戸時代には盗掘されていたことがわかる。

平成27年11月～28年3月にかけて、中九州自動車道建設作業道の拡張工事に伴って石棺蓋の移設が行われている。工程は一旦仮移転して法面掘削後、約5m南西の位置に旧位置とほぼ同じ状況で崖面に立て掛けるように設置しているもので、仮移転の際に実測調査を行っており、詳細については別稿で紹介したい。

出土遺物は全く知られていないため、石棺の特徴から5世紀後半頃の時期が推定される。

参考文献

- (1)『朝地町史』昭和42年 朝地町史刊行会
- (2)『あさじ地名考』昭和63年 朝地町文化財保護委員会
- (3)柄木田文明 2006 「中条唯七郎『九州道中日記』第1巻」『成蹊論叢 43号』

丸山古墳石棺蓋について

井大樹（大分県立埋蔵文化財センター）

平成 27 年付近の道路工事に伴って丸山古墳の石棺蓋が移動することになった。そこで工事の期間一時的に付近に仮置きすることになり、石棺蓋の内外面が観察できる状態となった。今回、工事に伴い実測する機会を得たのでその内容を報告したい。

丸山古墳の石棺蓋は、江戸時代にはすでにその存在が知られており、天保2年頃に書かれた『九州道中日記』に現在のような形で墳丘から離れ位置していたことが記述されている。その後、1967 年朝地町史の中で初めて実測図を含んだ報告が行われた。これには石棺蓋が保存されてきた経緯も記されており、明治 40 年頃石棺蓋を材料にし、記念碑をつくる話が持ち上がった際に、地元の有志によって丸山長者伝説にまつわる遺産であるので、残さなければいけないとの意識が高まり、石棺蓋の内側に「丸山ノ銭蓋石古来久伝世不可移動」と銘文を線刻し保存されたとまとめられている。

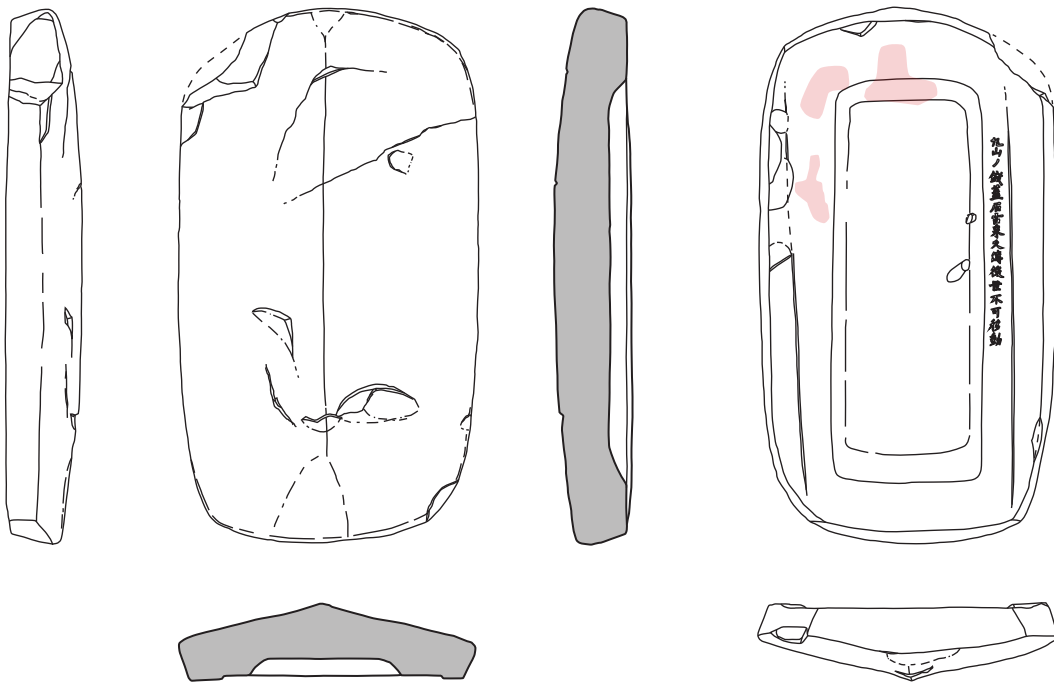
石棺蓋の材質は凝灰岩で硬質である。全長は縦 260 cm、横幅は 119.5 cm、厚さは最大で 29 cm、天井部の刳抜きの深さは 3.5 cm ほどである。石棺蓋の全体は小判形をしており、一部欠損がみられるものの残りは良好で、外面の中心には稜が作り出され、断面は屋根形になっている。稜の端は両方とも一面作り出され、手前の端の面が大きい。これは全体の形がやや歪なことや、大きな節理が入っていることから材料の石の形や大きさが影響したと考えられる。また、四方の端は外面から内面に向かって直線的に内傾している。

石棺蓋の内面は中心に縦 160 cm、横 55 cm の隅丸方形の刳抜きがみられる。その深さは 3.5 cm と浅く全体は平坦であり、縦方向の端はやや緩やかな傾斜である。特徴的なのは左右の端にみられる帯状の張り出しで、幅 12 cm、高さ 1 cm ほどである。臼杵市の下山古墳の組合式家形石棺にもこのような張り出しが確認でき、棺身の側板としっかり組み合わさるようにこのような部分が作り出されたと考えられる。また、内面の一部には赤色顔料の塗布がみられ、1968 年の報告に古墳の付近に朱が大量にみられるという記述と合わせて考えれば、主体部には朱が多く使われていたと想定される。

組合家形石棺は県内では世利門古墳（大分市）、高倉古墳（臼杵市）、下山古墳（臼杵市）が知られている。先述したように丸山古墳の石棺は、下山古墳の石棺と類似した部分があり、関連が考えられる。しかし、下山古墳の石棺と比較すると石棺蓋外面の装飾が無くなっている点や、内部の刳抜きが浅くなっている点などを考えれば、形式的には下山古墳の石棺より後出するものと思われる。したがって、丸山古墳の石棺の年代は 5 世紀中頃～後半と考えられる。

参考文献

- ・朝地町史編集委員会 編 1967 『朝地町史』 朝地町史刊行会
- ・若杉竜太 1997 「九州石棺考」（『先史学・考古学研究』Ⅱ） 龍田考古会

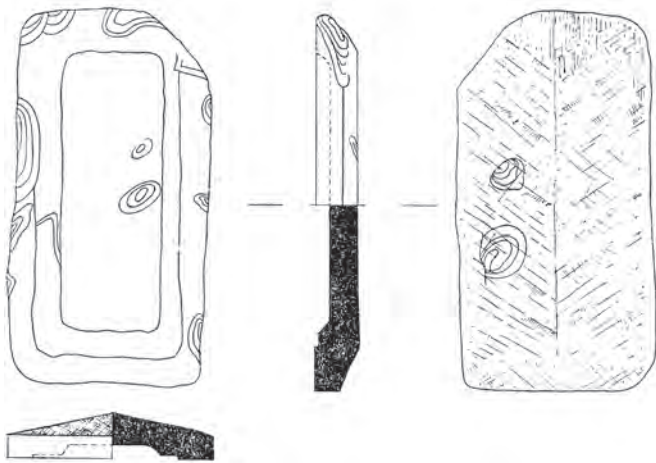


丸山ノ錢蓋石古来久伝後世不可移動

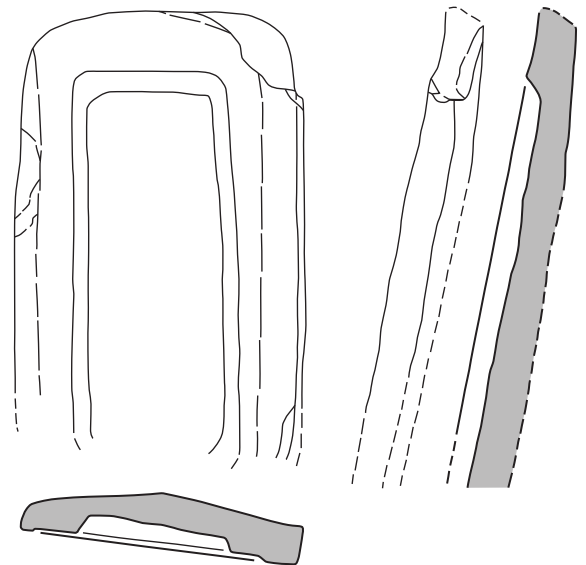
丸山ノ錢蓋石古来久伝後世不可移動

赤色顔料塗布部分

第21図 丸山石棺蓋実測図 (1/30)



第22図 1967年丸山石棺蓋実測



第23図 1997年丸山石棺蓋実測図



丸山古墳石棺蓋 (移設前)



丸山古墳石棺蓋 (移設後)

丸山古墳写真図版



丸山古墳遠景（南）



墳丘近景（東）



墳丘近景（北）



墳頂部



石棺蓋（内面）



石棺蓋（小口側面）

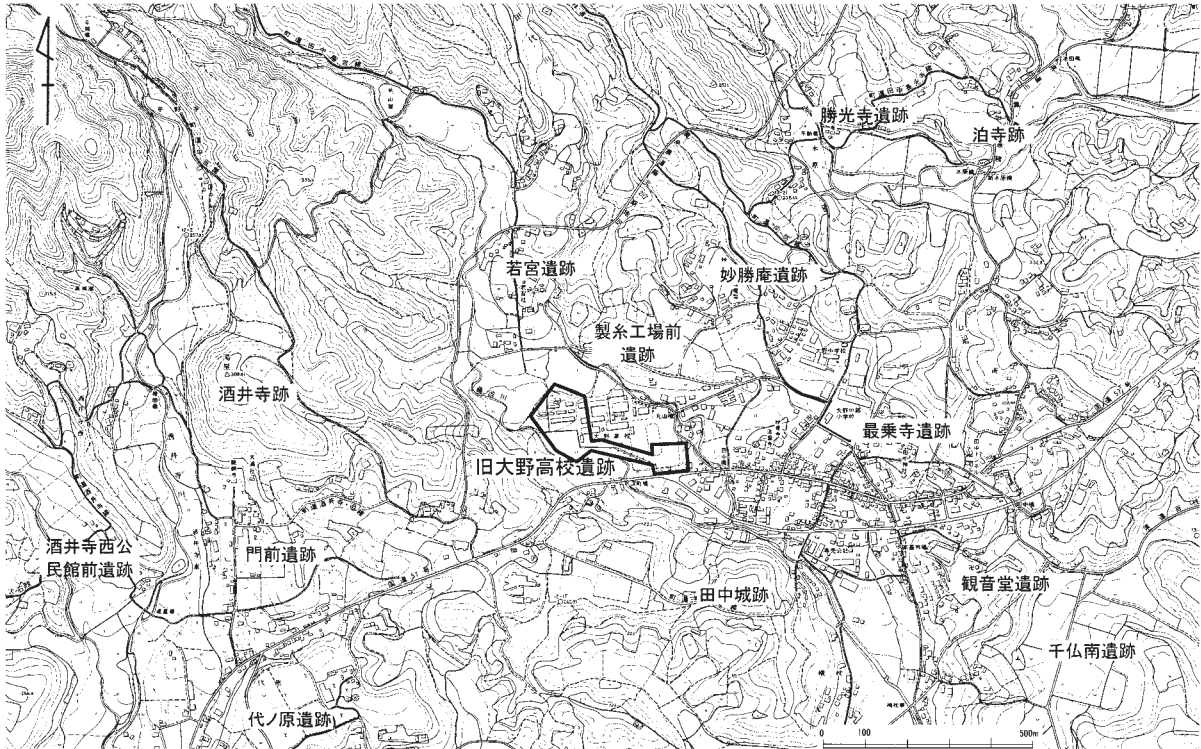


石棺蓋（外面）

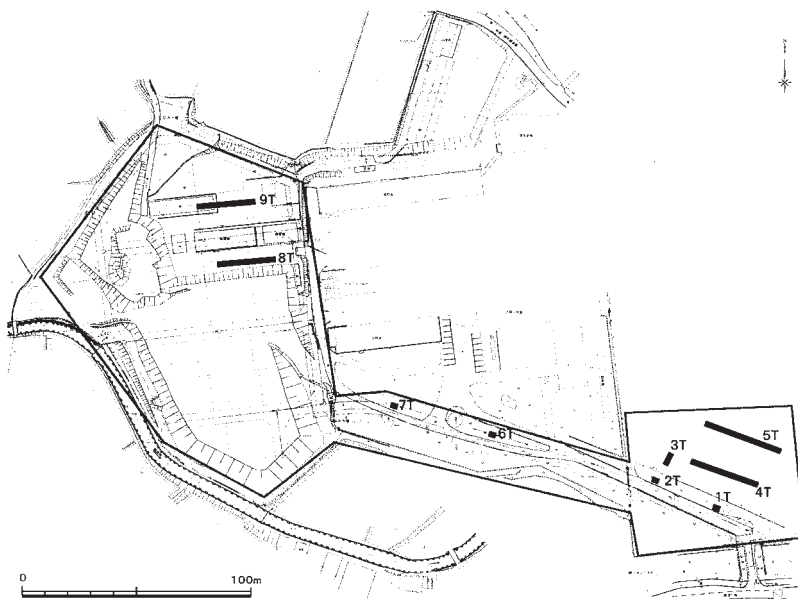
V 旧大野高校遺跡

調査の概要

調査区は大野町中心付近の田代川沿岸の低地上で、旧大野高校(現大野公民館)の敷地内である。付近では旧石器時代等の遺跡が多い大野原地域であり、当遺跡でも昭和42年頃に校庭北側付近よりナイフ形石器等が採集されて周知遺跡となっている。校舎跡地で宅地造成、校庭跡地で道路改良および保育園建設計画により、開発予定範囲に調査トレンチとして、道路改良4箇所、保育園予定地3箇所、宅地造成2箇所の計9か所を設定し、幅1m長さ延べ210mを重機による表土剥ぎを行った。



第24図 旧大野高校遺跡調査位置図



第25図 旧大野高校遺跡調査区配置図

すべてのトレンチで攪乱層が表土より90~120cm程堆積し、後世の造成による盛土と思われる。その下層は礫を含む硬質の粘土層を検出し、さらに下層は礫が多くなることから氾濫原であったと推定される。過去の遺物表採地から離れているためか、今回の調査範囲では旧石器時代の包含層は確認できなかった。宅地造成予定地の第9トレンチより若干の土器片が見られたが、顕著な遺構・遺物は全く確認できないため、工事着工に問題なしと判断した。



旧大野高校遺跡調査写真

VI 城ヶ平遺跡

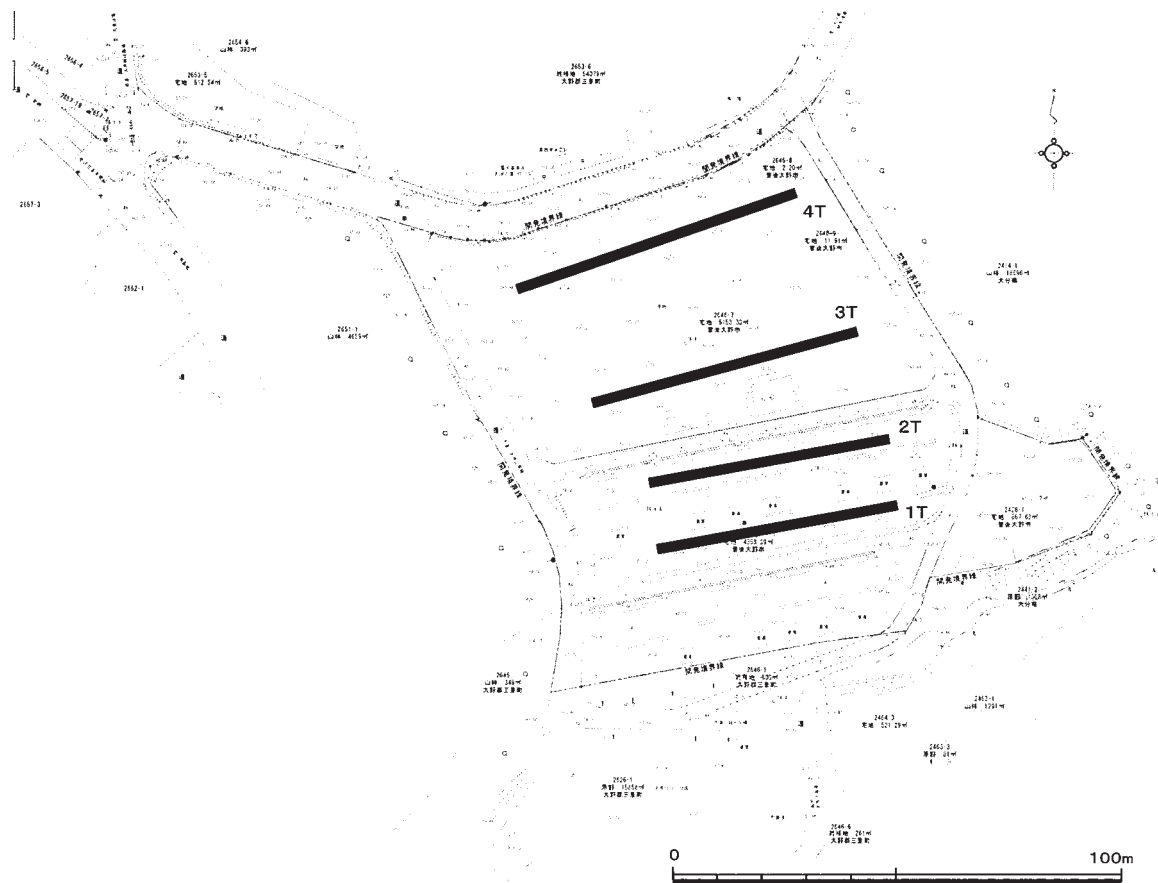
調査の概要

調査区は三重町中心付近を見下ろす台地上で、竜ヶ鼻古墳の真上の位置である。県営住宅跡地に宅地造成が予定されている範囲に調査トレンチとして4箇所設定し、幅 2.5m長さ延べ 195mを重機による表土剥ぎを行った。

第1・2トレンチで攪乱層が表土より 80～100 cm堆積し、後世の造成等による攪乱が多く、特に第2トレンチはローム層の残りも良好ではなかった。第3・4トレンチでは表土直下でローム層が現れ、大幅な削平を受けていることが判明した。遺構・遺物は全く確認できないため、工事着工に問題なしと判断した。



第 26 図 城ヶ平遺跡調査位置図



第 27 図 城ヶ平遺跡調査区配置図



城ヶ平遺跡調査写真

報 告 書 抄 録

フリガナ	ブンゴオオノシナイイセキハクツツチヨウサガイヨウホウコクシヨ
書名	豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書8
副書名	平成28年度調査
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	田中裕介 玉川剛司 井大樹 塩見恭平 高木慎太郎 竹永昂平 諸岡 郁
編集機関	豊後大野市教育委員会
所在地	〒879-7131 大分県豊後大野市三重町市場1200番地
発行年月日	平成30年3月16日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ウルシオ 漆生古墳群	ブンゴオオノシ オガタマチ 豊後大野市 緒方町 コシオ オオクボ シロヤマ 越生字大久保・城山	44212	212203	32°58'30"	131°29'27"	2016.12.22 ～2017.01.07	32.3m ²	確認調査
ボウノハル 坊ノ原古墳	ブンゴオオノシ オオノマチ 豊後大野市 大野町 クワハル ハブ 桑原字羽部	44212	212412	33°01'49"	131°28'27"	2016.10.19 ～2016.12.20	25m ²	確認調査
マルヤマ 丸山古墳	ブンゴオオノシ アサジマチ 豊後大野市 朝地町 カミオツカ マルヤマ 上尾塚字丸山	44212	212366	32°59'51"	131°26'18"	2017.03.06 ～2017.03.15		測量調査
キウオオノコウコウ 旧大野高校遺跡	ブンゴオオノシ オオノマチ 豊後大野市 大野町 タナカ リュウオウ 田中字竜王他	44212	212397	33°02'27"	131°29'48"	2016.11.03 ～2016.11.05	210m ²	確認調査
ジョウガヒラ 城ケ平遺跡	ブンゴオオノシ ミエマチ 豊後大野市 三重町 アカミネ ジョウガヒラ 赤嶺字城ケ平	44212	212064	32°59'11"	131°35'18"	2017.02.27 ～2017.03.01	487m ²	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
漆生古墳群	墳墓	古墳	墓坑跡・石棺		前方後円墳ほか
坊ノ原古墳	墳墓	古墳	周溝	土師器	前方後円墳
丸山古墳	墳墓	古墳	石棺		円墳
旧大野高校遺跡	散布地				
城ケ平遺跡	散布地				

豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書8
平成28年度調査

発行日 2018年3月16日発行

編集・発行 豊後大野市教育委員会

〒879-7131豊後大野市三重町市場1200

